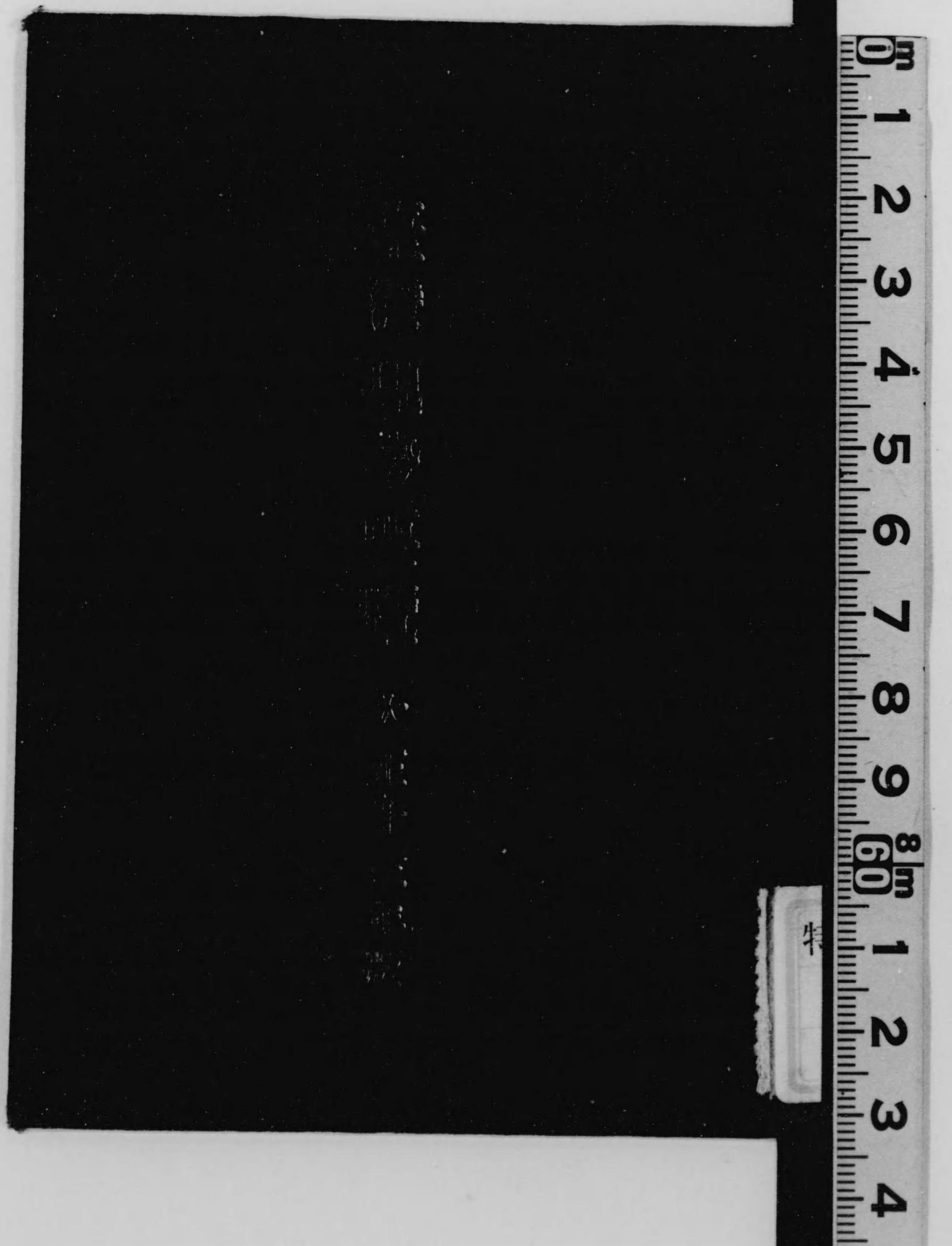


始

臺灣現勢要覽

大正十三年版

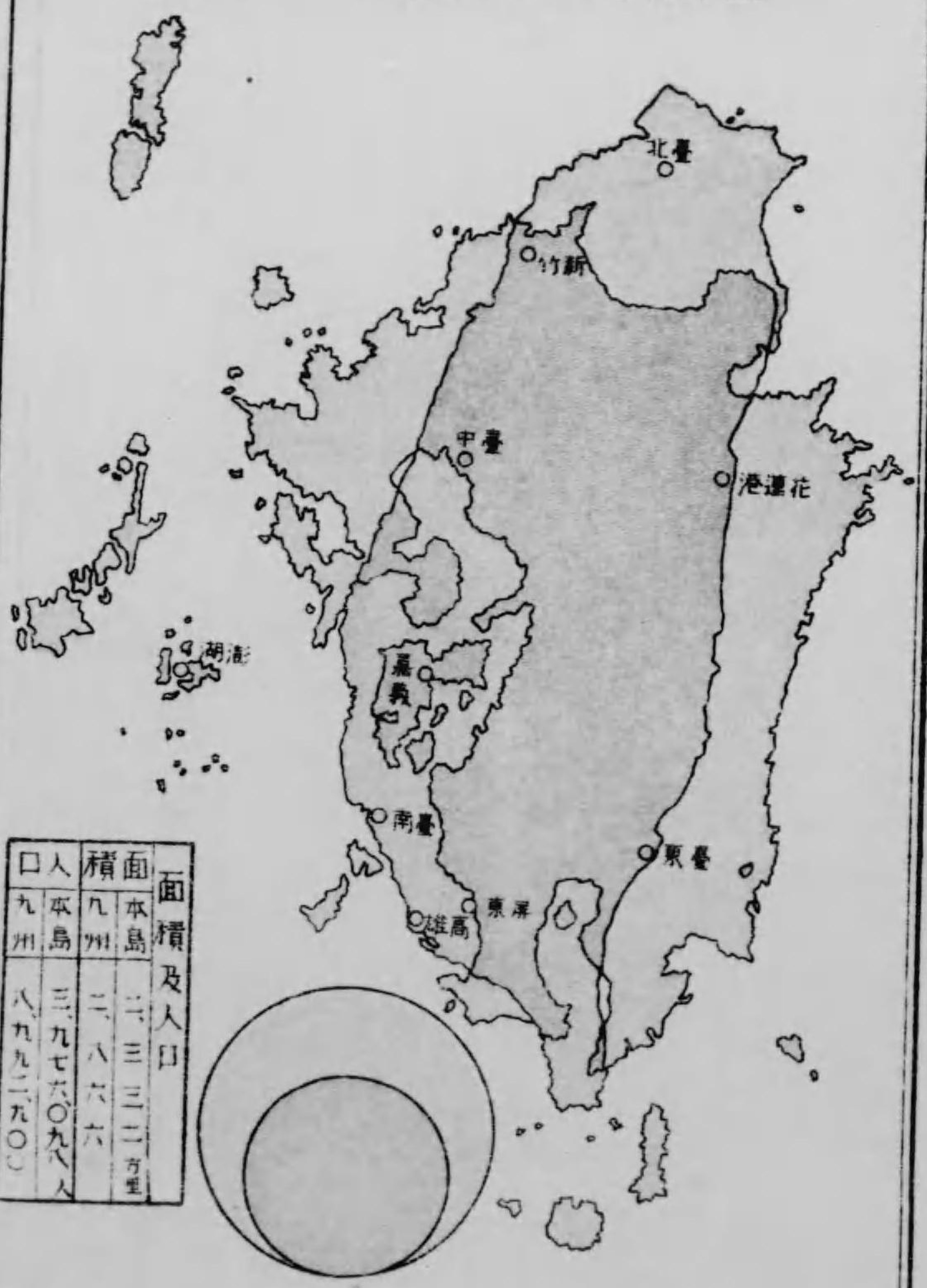
臺灣現勢要覽

大正
13. 12. 4
寄贈

同盟通信社寄贈本

特279
82

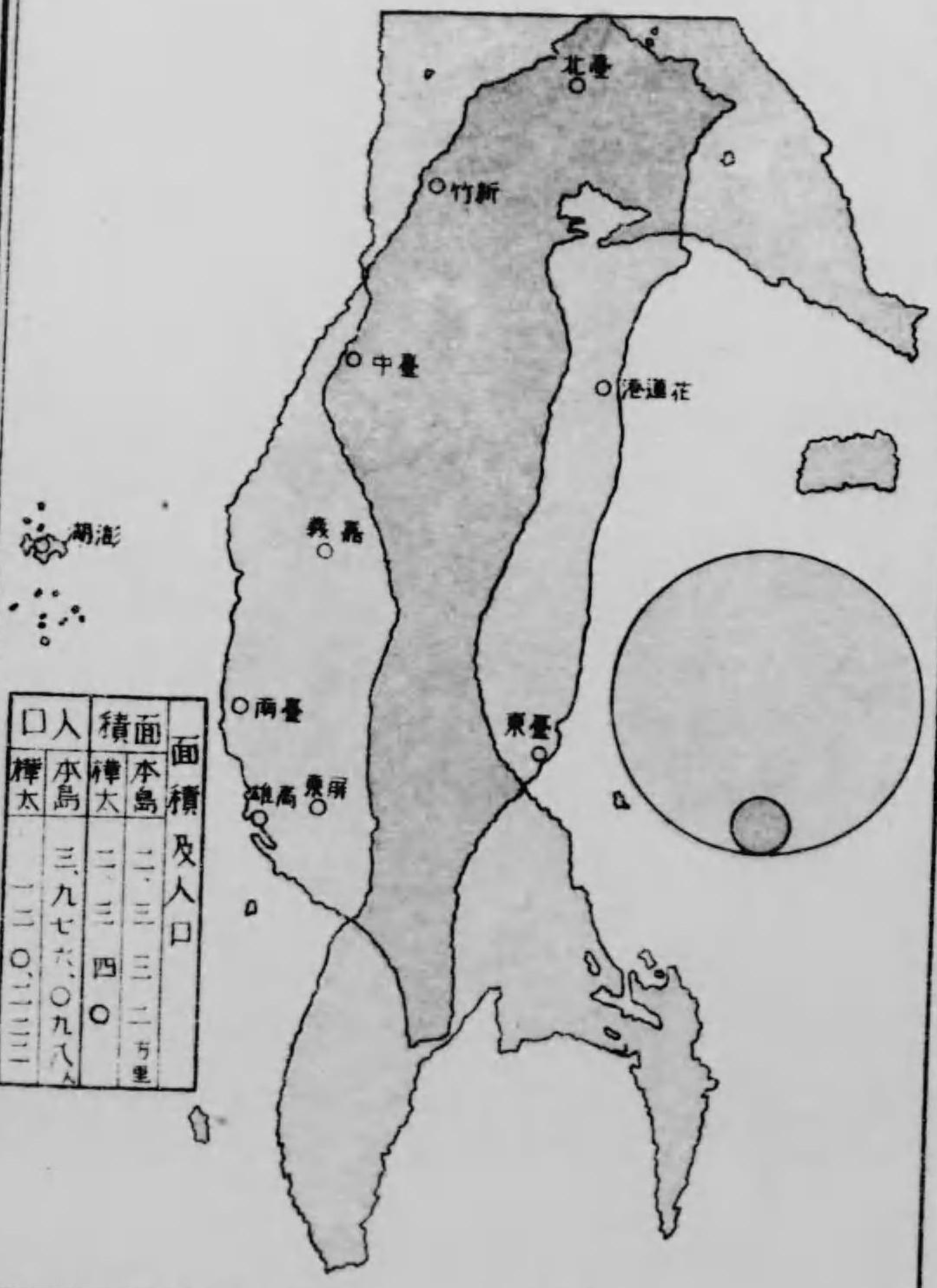
臺灣及九州面積人口比較



面積及人口

面積		人口	
本島	九州	本島	九州
二、三三二方里	二、八六六	三、九七六、〇九八人	八、九九二、九〇〇

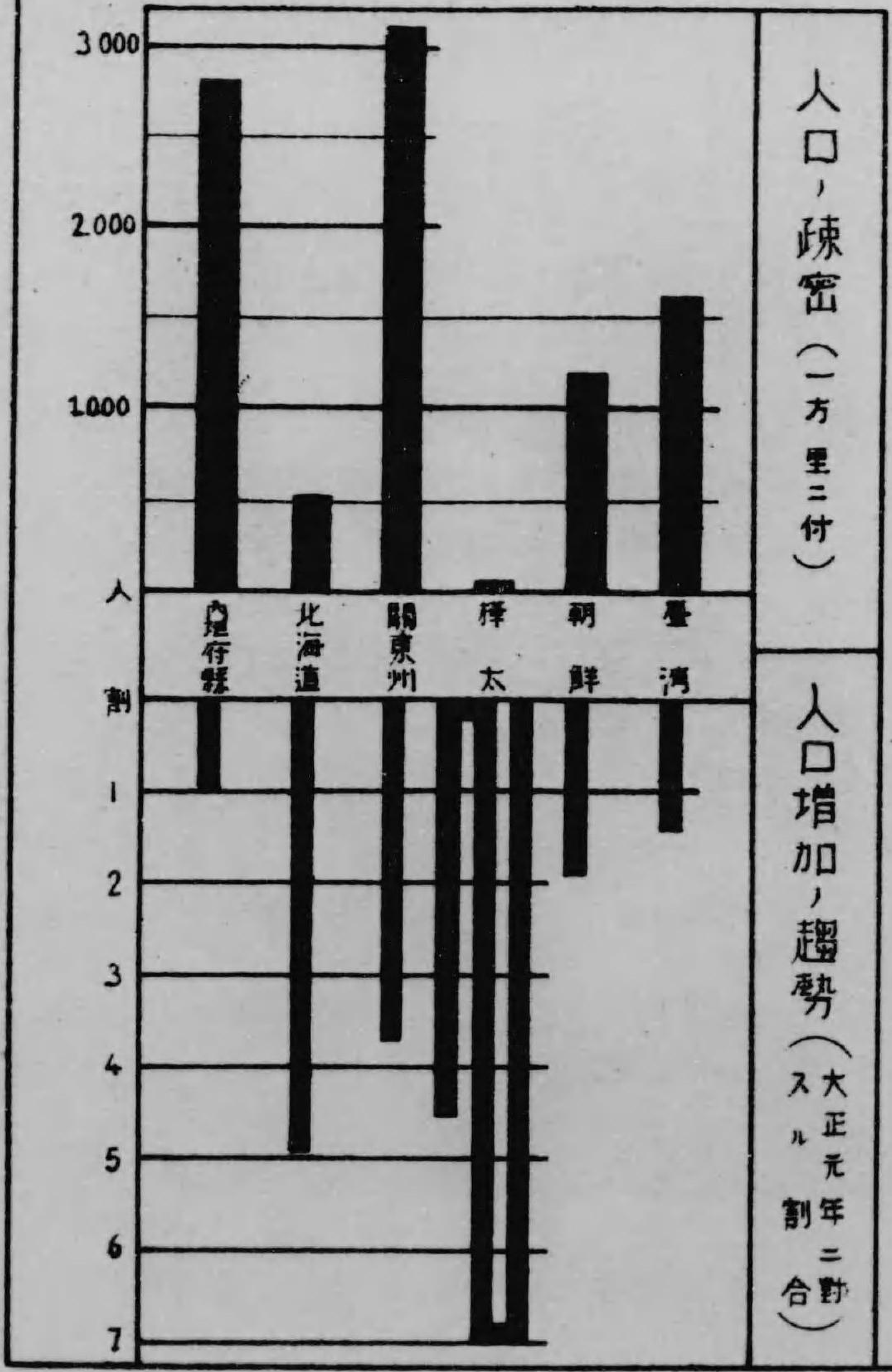
臺灣及樺太面積人口比較



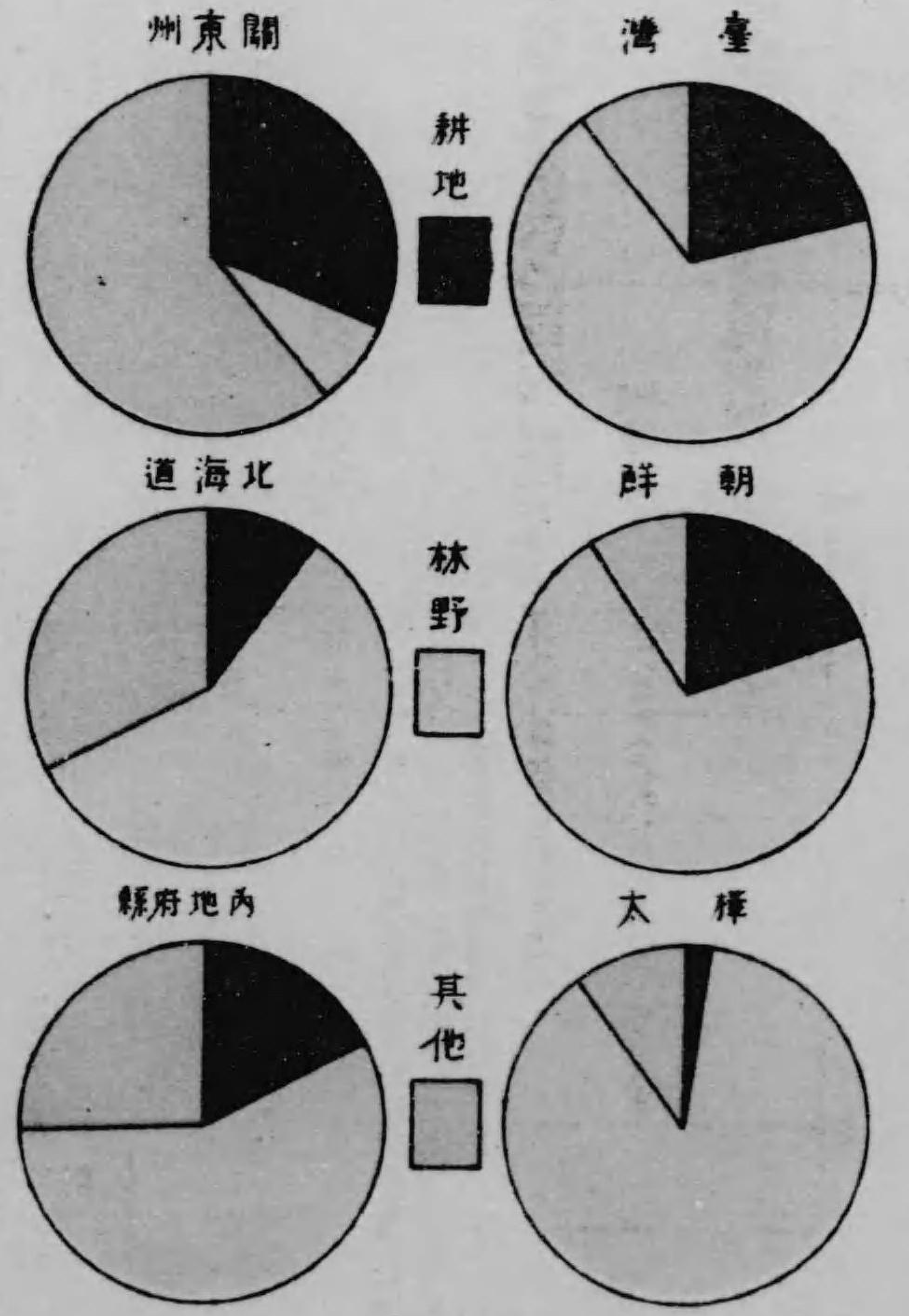
面積及人口

面積		人口	
本島	樺太	本島	樺太
二、三三二方里	二、三四〇	三、九七六、〇九八人	一二〇、二二二

（大正十一年）



土地ノ利用
（百分比例）



凡例

一本書は、臺灣の現勢を知るの便に資せんか爲め、主要なる事項に就て、その統計的説明を試みたるものなり。

一本書は、大正十一年の事實を基礎としたるも、その最近の統計あるものは、努めて之を採り、又大正十一年の事實不明のもの又は特に必要と認めたるものは、大正十一年以前の統計をも採りたり。

一本書は、主として臺灣の現勢を知るを目的とするも、特にその變遷進步の狀態を説明するの必要ある事項に就ては、累年の統計をも擧けたり。

一本書は、帝國に於ける臺灣の地位を説明するの便に供せんか爲め、その必要なる事項に就ては、內地府縣、北海道、朝鮮、樺太、關東州等との比較對照をも試みたり。

大正十三年十月

臺灣總督府

臺灣現勢要覽目次

一 位置……一
二 面積……五
三 山嶽……七
四 河川……一三
五 土地の利用……一五
六 氣溫……一九
七 雨量……二三
八 人口……二七
九 本籍別内地人……三一
一〇 在外臺灣人……三七
一一 在留外國人……四一
一二 臺灣語を話す内地人……四五
一三 國語を解する本島人……四七

一四　婚姻、離婚、出生、死亡……四九
一五　出生率……五三
一六　死亡率……五七
一七　人口の增加……六一
一八　蕃人……六五
一九　行政區劃……六九
二〇　州及廳の面積……七一
二一　州及廳の人口……七五
二二　主要都市……七九
二三　農業戶數……八五
二四　耕地面積……八九
二五　水利……九三
二六　農產……九五
二七　畜產……九九
二八　林產……一〇三

二九　鑛產……一〇七
三〇　水產……一〇九
三一　工產……一一三
三二　糖業……一一七
三三　貿易……一二一
三四　對手國別外國貿易……一二七
三五　支那香港及南洋貿易……一三一
三六　重要品別外國貿易……一三五
三七　重要品別內地貿易……一三九
三八　港別貿易……一四五
三九　財政……一四九
四〇　專賣……一五三
四一　銀行……一五七
四二　物價……一五九
四三　教育……一六三

四四　衞生機關……一六九
四五　水　道……一七三
四六　ペストとマラリヤ……一七七
四七　阿片吸食特許者……一八一
四八　鐵　道……一八五
四九　郵便、電信、電話……一八九
五〇　警察官署及職員……一九三
五一　最近十一年間の進歩……一九五

圖表

一　臺灣及九州面積人口比較
二　臺灣及樺太面積人口比較
三　土地の利用
四　人口の疎密及人口增加の趨勢

臺灣現勢要覽

一　位　置

臺灣は帝國の最南端に位し、臺灣本島、澎湖列島及其の他の附屬島嶼より成る。今之を經緯度に繹ぬるに、東經百十九度十八分より百二十二度六分、北緯二十一度四十五分より二十五度三十八分に至る。北は海上六百四十一浬にして九州の南端鹿兒島に達し、西は臺灣海峽を隔てゝ近く支那大陸に相接し、東は太平洋を隔てゝ遠く米大陸に相對し、南はバッシー海峽を隔てゝ近く比律賓群島に相隣す。

一　經度及緯度

臺灣本島	經度（東經）	極東	臺北州基隆郡棉花嶼東端	一二二・〇六度
		極西	臺南州北港郡口湖庄新港西端	一二〇・〇三
	緯度（北緯）	極南	高雄州恒春郡七星岩南端	二一・四五
		極北	臺北州基隆郡彭佳嶼北端	二五・三八

澎湖島

經度（東經）	極東	高雄州澎湖郡査母嶼東端	一一九・四三
	極西	高雄州澎湖郡花嶼西端	一一九・一八
緯度（北緯）	極南	高雄州澎湖郡大嶼南端	二三・一〇
	極北	高雄州澎湖郡目斗嶼北端	二三・四六

二　距離

基隆を基點とする直航浬程

那覇	三三四浬
鹿兒島	六四一
長崎	六三三
門司	七九九
神戶（門司經由）	九八二
横濱	一、二三七
釜山（門司經由）	八六二
大連	八五〇
福州	一五一

厦門	二二六
汕頭	三一八
上海	四一八
香港	四七九
麻尼剌	七七六
海防（香港經由）	一、〇三五
西貢	一、三〇〇
盤谷	一、八九五
新嘉坡	一、八三四
バタビヤ	二、六九四

二　面積

臺灣の面積は二千三百三十二方里にして、帝國の總面積四萬四千百三十八方里中その五分三厘を占め、九州よりは稍〻小さく、樺太と伯仲し、朝鮮に比すれば約その六分の一に當る。尙ほ之を列國の面積に比すれば、瑞西(二、六七八方里)と和蘭(二、一一四方里)との中間に位す。

	面積(方里)	百分比例
總數	四四、一三八	一〇〇・〇
臺灣	二、三三二	五・三
朝鮮	一四、三一三	三二・四
樺太	二、三四〇	五・三
北海道	五、〇八四	一一・五
內地府縣	二〇、〇七〇	四五・五

本表の外租借地として關東州の面積二一九方里及委任統治に係る南洋群島の面積一六三方里あり。

三　山　嶽

臺灣は帝國第一の高山新高山を始めとし、海拔一萬尺以上のもの四十八座、九千尺級のもの十七座、八千尺級のもの二十四座、七千尺級のもの二十六座を有す。故に七千尺以上の高山の總數は百十五座の多きに達し、所謂「高山國」の名に背かずして熱帶、暖帶、溫帶、寒帶等各種の林相を有す。

帝國の全領土を通して一萬尺以上の高山は總數五十五座を算し、就中臺灣四十八座を占め、內地は僅かに七座を有し、北海道、朝鮮、樺太は共に之を缺く。即ち新高山は一萬三千七十五尺を以て第一位を占め、富士山は漸く第六位に在り、內地第二の高山赤石山は僅かに四十五位を占むるに過きす。

	海面よりの高さ	順位
新高山	一三、〇七五尺	一
次高山	一二、九七二	二
秀姑巒山	一二、六五〇	三
マボラス山	一二、五六〇	四

南湖大山	一二、五三一	五
富士山（內地）	一二、三八七	六
中央尖山	一二、二六〇	七
關山	一二、二〇〇	八
大水窟山	一二、〇二八	九
䓫萊主山北峰	一一、八九五	一〇
東郡大山	一一、八九五	一一
大雪山	一一、八八〇	一二
大霸尖山	一一、七九二	一三
雲峰	一一、七七八	一四
䓫萊主山	一一、六九五	一五
東巒大山	一一、四三六	一六
合歡山	一一、三〇〇	一七
北合歡山	一一、三〇〇	一八
東合歡山	一一、三〇〇	一九

南玉山	一一、一九一	二〇
桃山	一一、一八八	二一
シンカン山	一一、一五七	二二
畢祿山	一一、一五一	二三
丹大山	一一、一二四	二四
白姑大山	一一、〇五二	二五
䓫萊主山南峰	一一、〇〇五	二六
南双頭山	一一、〇〇〇	二七
能高山南峰	一一、〇〇〇	二八
卑南主山	一〇、九〇五	二九
千卓萬山	一〇、九〇三	三〇
カシバナン山	一〇、八六九	三一
郡大山	一〇、八六五	三二
タロコ大山	一〇、八六三	三三
卓社大山	一〇、八一六	三四

小關山	一〇、七四〇	三五
能高山	一〇、七三三	三六
屏風山	一〇、六七三	三七
大武山	一〇、六六五	三八
尖山	一〇、六六三	三九
バトツノフ山	一〇、六三〇	四〇
ハイノートーナン山	一〇、六三〇	四一
マヒザン山	一〇、四七八	四二
白石山	一〇、三五四	四三
ウハノシン山	一〇、三三四	四四
赤石山(內地)	一〇、三二四	四五
東俣山(內地)	一〇、三二三	四六
槍ヶ嶽(內地)	一〇、二〇四	四七
安東郡山	一〇、一九三	四八
轡大山	一〇、一五〇	四九

御嶽(內地)	一〇、一三八	五〇
關門山	一〇、〇七三	五一
大石公山	一〇、〇六〇	五二
白根嶽(內地)	一〇、〇五三	五三
小雪山	一〇、〇四三	五四
大蓮華(內地)	一〇、〇〇〇	五五

內地の分は第四十一同國勢一班に依る。

四　河川

臺灣は幅員狹く、その最も廣き部分と雖、僅かに四十里内外に過きす、且つ高峯南北に貫通するを以て、河川の發源孰れも近く、舟楫の便は多く望むへからす。流域二十里以上のもの僅かに十を算し、最長の河川たる濁水溪にして漸く四十二里に過きす。

	里
濁水溪	四二・〇
下淡水溪	三九・七
曾文溪	三三・七
淡水河	三三・一
大甲溪	三〇・〇
烏溪	二八・六
八獎溪	二八・三
秀姑巒溪	二三・六
卑南溪	二一・五
大安溪	二〇・五

本表は流域二十里以上のもののみを揭く。

五　土地の利用

臺灣の總面積は三百七十萬甲にして、內耕地七十七萬三千甲、林野二百五十四萬六千甲、其の他三十八萬八千甲なり。

今之を內地其の他と比較するに、總面積に對する耕地の割合最も大なるは、關東州の三割一分六厘にして、臺灣は二割九厘を以て之に亞き、樺太の四厘最も小なり。林野に於ては樺太の八割九分五厘最も大にして、臺灣は六割八分六厘を以て第三位を占め、關東州の八分最も小なり。耕地及林野以外の土地の割合最も大なるは關東州の六割四厘にして、朝鮮の九分二厘最も小なり。

	實數 耕地	實數 林野	實數 其他	百分比例 耕地	百分比例 林野	百分比例 其他
臺灣	七七三、八一六甲	二、五四六、三七八甲	三八八、三〇八甲	二〇・九	六八・六	一〇・五
朝鮮	四、三一七、三一八町	一五、八八三、〇〇〇町	二〇、五四四、八四二町	一九・四	七一・四	九・二
樺太	一五、九三二	三、二五三、〇〇三	三六八、二一〇	〇・四	八九・五	一〇・一
關東州	一〇七、五三九	二七、三一三	二〇五、六九四	三一・六	八・〇	六〇・四

北海道	八、五三二、二三四	五、四三七、三〇〇	三、〇一九、三五一	九・二	五八・四	三二・四
內地府縣	五、二六二、〇六四	一六、九八二、八五一	七、四一五、〇八〇	一七・五	五七・四	二五・一

一甲は九反七畝二十四步。

耕地は大正十一年末現在なり。

林野は臺灣、樺太、關東州は大正十一年度末現在、朝鮮は大正十二年五月末日現在、內地及北海道は大正十年度末現在なり。

六　氣　溫

臺灣は北回歸線に跨り、半は熱帶圈に位するか故に、內地に比すれは夏季長く、冬季短きも、その最高氣溫は敢へて內地より高しと謂ふにあらす。而も冬季は頗ろ暖かにして、高山ならされは降雪なく、北部に於ては偶々霜を見ることなしとせさるも極めて稀れなり。

今內地其の他と比較するに、累年平均氣溫は我臺灣最も高きも、最高極度の氣溫に至りては內地其の他の部分却つて高し。即ち臺東の三十九度（華氏百二度二分）は新潟の三十九度一分（華氏百二度四分）よりは一分低く、又臺北の三十七度五分（華氏九十九度五分）は京城と同しくして大阪の三十七度六分（華氏九十九度七分）よりは一分低し。更に恒春の三十四度九分（華氏九十四度八分）は大泊函館及札幌を除けは他の何れの地方よりも低し。

	大正十一年平均 攝氏度	大正十一年平均 華氏度	累年 平均 攝氏度	累年 平均 華氏度	累年 最高の極 攝氏度	累年 最高の極 華氏度	累年 最高の極 年月	累年 最低の極 攝氏度	累年 最低の極 華氏度	累年 最低の極 年月
臺灣 恒春	二四・六	七六・三	二四・三	七五・七	三四・九	九八・四	七―六	一〇・一	五〇・二	三四―二

臺東	二三・七	七四・七	二三・四	七四・一	三九・〇	一〇二・二	三—七	七・四	四五・三	七—一
臺南	二三・三	七三・九	二三・〇	七三・四	三六・九	九八・四	五—七	二・四	三六・七	七—二
澎湖島	二二・八	七三・〇	二二・五	七二・五	三三・五	九二・三	四—八	七・三	四五・一	三四—二
臺中	二二・三	七二・一	二二・一	七一・八	三七・二	九九・〇	三五—八	(一)一・〇	—	三四—二
臺北	二一・八	七一・二	二一・六	七〇・九	三七・五	九九・五	四—七	(一)〇・二	—	三四—二
基隆	二一・七	七一・一	二一・六	七〇・九	三七・四	九九・三	七—八	三・〇	三七・四	三四—二
朝鮮										
釜山	一四・一	五七・四	一三・四	五六・一	三五・〇	九五・〇	九—八	(一)一四・〇	—	四—一
京城	一一・〇	五一・八	一〇・九	五一・六	三七・五	九九・五	八—八	(一)二三・三	—	九—一
城津	八・〇	四六・四	七・九	四六・二	三七・五	九九・五	八—七	(一)二四・六	—	四—一、八—一
樺太										
大泊	二・六	三六・七	二・八	三七・〇	二八・五	八三・三	九—七	(一)三二・七	—	四三—一
關東州										
旅順	一〇・五	五〇・九	一〇・一	五〇・二	三五・四	九五・七	八—八	(一)一九・三	—	四—一、四—二

北海道									
函館	八・九	四八・〇	八・五	四七・三	三三・五	九二・三	三七—八	(一)二一・七	—	二四—一
札幌	七・二	四五・〇	六・九	四四・四	三三・四	九二・一	二七—八	(一)二五・六	—	二六—二
旭川	五・三	四一・五	五・二	四一・四	三五・〇	九五・〇	九—七	(一)四一・〇	—	三五—一
內地府縣										
那覇	二二・〇	七一・六	二二・一	七一・八	三五・五	九五・九	五—七	四・九	四〇・八	七—二
長崎	一五・八	六〇・四	一五・七	六〇・三	三六・七	九八・一	二七—八	(一)五・六	—	四—一
大阪	一五・九	六〇・六	一五・〇	五九・〇	三七・六	九九・七	四二—八	(一)七・一	—	二四—一
東京	一四・五	五八・一	一三・八	五六・八	三六・六	九七・九	一九—七	(一)八・二	—	七—一
新潟	一三・二	五五・八	一二・六	五四・七	三九・一	一〇二・四	四二—八	(一)九・七	—	三五—二
青森	九・八	四九・六	九・三	四八・七	三六・〇	九六・八	四—八	(一)一九・〇	—	二四—二

(一)は零點下を示す。

七　雨　量

臺灣は南北に依り其の降雨期を異にす。即ち北部は十月より翌年三月迄の冬季六箇月、南部は五月より九月に至る夏期五箇月を雨期とす。北部は基隆附近最も降雨量多く、基隆に近き火燒寮（暖々街より約一里）は一年六千九百粍を以て全島の第一位を占め、且つ世界有數の降雨地として知らる。南部に於ては阿里山の四千粍最多量を示し、降雨量の最も少きは澎湖島にして一年の總量一千三百粍なり。

更に之を內地其の他と比較するに、臺灣は全島を通して一般に他の地方よりも降雨量多し。

臺灣	大正十一年總量 粍	累年總量平均 粍	大正十一年最大日量 粍	大正十一年最大日量月日
恒春	二、六八一	二、一六六	二四四	九—一八
臺東	二、一〇一	一、八四八	二一八	九—一八
臺南	一、九九二	一、七三六	一六七	八—一三
澎湖	一、三六〇	九六七	一六一	九—一九

阿里山	三、四三五	四、〇〇八	二五〇	八—二五
臺中	一、九八八	一、六九五	一六〇	八—二九
臺北	二、四三三	二、〇七三	二五六	八—二三
基隆	三、〇一一	二、九一八	三九四	六—一七
火燒寮	五、九〇三	六、九三九	?	?
朝鮮				
釜山	一、一一三	一、四一三	九三	一〇—二五
京城	一、五五三	一、二三七	一五〇	八—一三
城津	九二七	六九七	一二四	七—二六
樺太				
大泊	八三二	七三二	三七	七—一〇
關東州				
旅順	六四六	五七四	一三〇	九—二
北海道				
函館	一、四三〇	一、一五一	八三	九—一五
札幌	一、三三九	一、〇〇八	六四	八—二九
旭川	一、一七〇	一、〇六四	五三	八—二四
內地府縣				
那霸	二、六六一	二、一二八	一一〇	七—一六
長崎	二、六九九	一、九〇九	二八一	九—一五
大阪	一、三九四	一、三七九	一三三	七—一四
東京	一、四一一	一、五七四	八九	七—一四
新潟	一、七一〇	一、八一三	六九	九—一
青森	一、九三〇	一、三七三	八二	二—一七

八 人口

臺灣の總人口は大正十一年末現在三百八十二萬人にして、內內地人十七萬八千人、本島人三百六十一萬人、外國人二萬九千人なり。

大正九年十月一日施行の國勢調査の結果に依れは、帝國の總人口は七千七百萬人にして、臺灣は實に其の四分七厘を占む。更に臺灣の人口を列國のそれに比すれは瑞西（三百九十萬人）と丁抹（三百二十七萬人）との中間に位す。

一 種族別人口

	總數	男	女	百分比例
總數	三,八二一,五三八	一,九七四,八一四	一,八四六,七二四	一〇〇・〇
內地人	一七七,九五三	九九,一二八	七八,八二五	四・七
本島人	三,六一四,二〇七	一,八五二,八六四	一,七六一,三四三	九四・五
外國人	二九,三七八	二二,八二二	六,五五六	〇・八

本表には蕃地居住の生蕃八萬三千百六十四人を含ます、平地居住の蕃人四

萬八千八百三十六人は之を本島人中に算入す。

二　內地其の他との人口比較

（大正十一年十二月末日現在）

	實數	百分比例	一方里に付
總數	七九、三三四、三一一	一〇〇·〇	一、七九五
臺灣	三、八二一、五二八	四·八	一、六九
朝鮮	一七、六二六、七六一	二二·二	一、二三三
樺太	一二〇、三三三	〇·二	五一
北海道	二、三九五、〇〇〇	三·三	五一〇
內地府縣	五五、〇六〇、八〇〇	六九·五	二、七四三

本表の外租借地としての關東州（州內）は人口六十八萬六千八百九十三人を有し、一方里に付人口三千百三十六人及大正九年十月一日現在南洋群島は人口五萬二千二百二十二人を有し一方里に付人口三百二十人を算す。
內地府縣及北海道は大正十一年十月一日現在なり。

九　本籍別內地人

臺灣在住內地人の總數は大正九年十月一日施行の國勢調査の結果に依れは、十六萬四千人にして、內熊本縣の一萬六千三百五十三人第一位を占め鹿兒島縣は一萬六千二百七十二人を以て之に亞き、福岡縣は遙かに下りて八千八百九十八人を以て第三位に在り、廣島、山口の兩縣順次之に亞き其の最も少きは青森縣の二百八十二人なり。

府縣	人口	百分比例	順位
熊本	一六、三五三	一〇・一	一
鹿兒島	一六、二七二	九・九	二
福岡	八、八九八	五・四	三
廣島	八、四〇二	五・一	四
山口	七、四六三	四・五	五
佐賀	六、七八〇	四・一	六
東京	六、三四七	三・九	七

長崎	六、〇三八	三・七	八
宮城	五、六五七	三・四	九
大阪	四、六七五	二・八	一〇
大分	四、五三四	二・八	一一
兵庫	四、四五六	二・七	一二
新潟	四、三三〇	二・六	一三
愛知	三、八三五	二・三	一四
愛媛	三、七三二	二・三	一五
岡山	三、一三四	一・九	一六
宮崎	二、八三〇	一・七	一七
高知	二、七八九	一・七	一八
岐阜	二、六五〇	一・六	一九
沖縄	二、四三三	一・五	二〇
石川	二、四二八	一・五	二一
香川	二、四〇一	一・五	二二

福島	二、三九〇	一・五	二三
島根	二、三一七	一・四	二四
静岡	二、二九五	一・四	二五
和歌山	二、二〇六	一・三	二六
京都	二、一四二	一・三	二七
茨城	二、一一三	一・三	二八
徳島	一、九七九	一・二	二九
三重	一、九二三	一・二	三〇
長野	一、八七三	一・一	三一
福井	一、七八六	一・一	三二
千葉	一、七四九	一・一	三三
神奈川	一、六〇六	一・〇	三四
滋賀	一、五八六	一・〇	三五
山形	一、四九〇	〇・九	三六
鳥取	一、三八六	〇・八	三七

富山	一,二四七	〇・八	三八
山梨	一,〇六二	〇・六	三九
群馬	一,〇五三	〇・六	四〇
埼玉	一,〇三五	〇・六	四一
奈良	一,〇三五	〇・六	四二
北海道	九一二	〇・六	四三
栃木	八九五	〇・五	四四
岩手	八一七	〇・五	四五
秋田	七三六	〇・四	四六
青森	二八二	〇・二	四七

内地人總數一六四、二六六人中内地に本籍を有せさる者二六人、本籍不詳九人を除く。

一〇、在外朝鮮人

[illegible]

一〇　在外臺灣人

在外臺灣人の總數は、大正九年十月一日施行の國勢調査の結果に依れば、四千七百八十五人にしてその大部分は支那に在留す。即ち支那在留臺灣人の總數は四千二百三十六人にして、就中その三千八十五人は對岸厦門に居住し、福州は七百六十六人、汕頭は二百三十六人を算す。

支那以外の地方に在りては、爪哇の二百十八人第一位を占め、海峽植民地の百五人之に亞ぐ。

	總數	男	女
總數	四、七八五	三、〇一五	一、七七〇
關東州	一九	一四	五
青島	四	三	一
支那	四、二三六	二、六二五	一、六一一
厦門	三、〇八五	一、九一一	一、一七四
福州	七六六	四四八	三一八

汕頭	二三六	一六三	七三
廣東	三一	一八	一三
其他	一一八	八五	三三
爪哇	二一八	一四九	六九
海峽植民地	一〇五	八一	二四
新嘉坡	三三	二六	七
ジョホール州	三五	二六	九
其他	三七	二九	八
緬甸	七六	三八	三八
香港	五七	四二	一五
暹羅	三五	三〇	五
比律賓	三一	二九	二
濠州	三	三	―
智利	一	一	―

一一　在留外國人

臺灣在留外國人の總數は大正九年十月一日施行の國勢調査の結果に依れは、二萬三千六百六十四人なり。今之か國籍を繹ぬるに、支那人はその大部分を占め二萬三千四百六十七人を算し、英吉利人の八十九人、北米合衆國人の四十二人順次之に亞く。

總數	二三、六六四
支那	二三、四六七
英吉利	八九
北米合衆國	四二
西班牙	二六
智利	一〇
英領印度	五
ベネジュラ	四
比律賓	四

獨逸	三
露西亞	二
瑞典	二
佛蘭西	一
葡萄牙	一
丁抹	一
諾威	一
希臘	一
加拿陀	一
墨西哥	一
伯剌西爾	一
波蘭	一
濠洲	一

本表の外、外國に國籍を有せざる者七九九人、國籍不詳三人あり。

本表には、調査當日基隆碇泊の外國船乘組員をも含むを以て國籍數比較的多し。

一三　臺灣語を話す內地人

內地人にして臺灣語を話すものゝ數は、明治三十八年の六千八百二十九人より、大正四年の一萬六千五百九十一人に增加し、更に大正九年には一萬七千二百七十三人に增加したるも、その內地人千に對する割合は、大正四年の百二十二人五分より、大正九年の百五人二分に減退したり。

	總數	男	女	指數	男女別內地人千に付 平均	男	女
明治三十八年	六、八二九	六〇二〇	八〇九	一〇〇	一一九・一	一七三・八	三五・六
大正四年	一六、五九一	一三、四〇三	三一八八	二四三	一二二・五	一七六・九	五三・四
同九年	一七、二七三	一四、九六六	二三〇七	二五三	一〇五・二	一六一・六	三三・一

本表は第一回及第二回戶口調查竝に第一回國勢調查の結果にして、何れも十月一日現在なり。

一三　國語を解する本島人

本島人にして國語を解するものゝ數は、明治三十八年の一萬一千二百七十人より、大正四年の五萬四千三百三十七人に增加し、更に大正九年には九萬九千六十五人に增加したるも、尙ほ本島人千に對し、僅かに二十八人六分を算するに過ぎす。

	總數	男	女	指數	男女別本島人千に付 平均	男	女
明治三十八年	一一、二七〇	一〇、八〇一	四六九	一〇〇	三・八	六・八	〇・三
大正四年	五四、三三七	五〇、一四三	四、一九四	四八二	一六・三	二九・一	二・六
同九年	九九、〇六五	八七、八九七	一一、一六八	八七九	二八・六	四九・三	六・六

本表は第一回及第二回戶口調査竝に第一回國勢調査の結果にして、何れも十月一日現在なり。

一四　婚姻、離婚、出生、死亡

臺灣に於ける最近十一年間の婚姻、離婚、出生及死亡を觀るに、婚姻は大正元年の三萬七千九百より大正十一年は三萬七千八百に減し、離婚は同しく五千より四千に減し、出生は年により多少の差異あるも、大體に於ては增加の傾向を有し、大正元年の十四萬人より大正十一年の十六萬人に增加し、同しく死亡は年に依り非常の相違あり、大正七年の如き十二萬五千人の多きに達したるも、大正十一年には九萬五千人に減退したり。從つて出生の死亡超過數は年により甚しき懸隔あり、大正七年の如き僅かに二萬人に過きさりしか、大正十一年には六萬人以上に達したり。

	婚姻	離婚	出生	死亡	自然增加（出生超過）
大正元年	三七、九一九	五、〇八二	一四〇、四九八	八四、九六三	五五、五三五
同　二年	三六、一六七	五、一六〇	一四一、三七九	八六、六一〇	五四、七六九
同　三年	三三、九七七	四、六六四	一四六、一三六	九七、五一一	四八、六二五
同　四年	三八、五八六	五、一九五	一四三、五〇五	一一三、一二三	三〇、三八二

同　五年	三七,六〇四	五,四四五	一三三,七一七	一〇三,五一九	三一,一九八
同　六年	三八,〇九五	五,〇七八	一四八,二〇九	九七,九四九	五〇,二六〇
同　七年	四〇,九〇三	四,九六八	一四五,一六三	一二四,六七七	二〇,四八五
同　八年	三八,三四一	五,一六五	一四三,三一〇	九八,九九一	四三,三一九
同　九年	四〇,九一五	四,七一三	一四七,三〇八	一一九,四七七	二七,八三一
同　十年	四〇,八二九	四,六五八	一六一,九八七	九一,五一三	七〇,四七四
同十一年	三七,八三一	四,一二五	一六一,八二九	九五,三七二	六六,四五七

一五 出生率

臺灣の出生率は之を最近十一年間に就て觀るに、年に依りて高低常ならすと雖、大正十年には人口千に付四十三人二分を以て最高度を示す。又之を內地人のみに就て觀るに、逐年增加の趨勢にありしものか、大正七年以來降下の傾向を有せしも、大正十年には再び增加の傾向に復し大正十一年には三十六人九分に達したり。本島人の出生率は特に高低常ならさりしも、大正十年には四十三人七分を以て最近十一年間の新記錄を示せり。

更に之を內地其の他と比較するに、臺灣は其の割合最も高くして北海道と稍〻一致し、內地府縣は我臺灣に於ける內地人のみの出生率と相似たる所あり。又列國中出生率の最も高きは智利の三十九人(大正十年)なるか故に、我臺灣の出生率は世界に於て最も高き部類に屬す。

一 出生率 (人口千に付生產)

	平均	內地人	本島人	外國人
大正元年	四一·九	二九·八	四二·五	二·八

同 二年	四一·四	三〇·七	四三·〇	一五·五
同 三年	四三·一	三〇·八	四三·八	一六·〇
同 四年	四〇·九	三二·七	四一·四	一八·八
同 五年	三八·一	三三·五	三八·四	一八·六
同 六年	四一·六	三七·四	四一·九	一九·二
同 七年	四〇·五	三五·四	四〇·九	二〇·三
同 八年	三九·二	三三·二	三九·六	二三·一
同 九年	四〇·一	三二·八	四〇·六	二二·六
同 十年	四三·二	三五·一	四三·七	二四·五
同 十一年	四二·三	三六·九	四二·八	二四·七

二 內地其の他との出生率累年比較（人口千に付）

	臺灣	朝鮮	樺太	關東州	北海道	內地府縣
大正元年	四一·九	二八·九	三二·〇	三〇·二	四三·五	三二·九
同 二年	四一·四	二九·七	三四·二	三二·三	四二·五	三二·七
同 三年	四二·一	二八·二	三一·九	三六·四	四〇·九	三三·二
同 四年	四〇·九	二七·三	三四·七	二八·七	四二·〇	三二·五
同 五年	三八·一	三三·八	三二·七	三一·〇	四二·七	三三·一
同 六年	四一·六	三三·八	二三·一	三一·二	四一·九	三一·九
同 七年	四〇·五	三四·〇	三一·八	二七·三	四〇·四	三一·三
同 八年	三九·二	二七·八	二八·四	二六·〇	三七·〇	三〇·八
同 九年	四〇·一	二七·六	三五·一	二六·三	四一·三	三四·七
同 十年	四三·二	二九·七	三一·二	二五·四	三八·五	三四·九
同 十一年	四二·三	三三·八	三一·三	三〇·九	?	?

一六　死亡率

臺灣の死亡率は之を最近十一年間に就て觀るに、一般に增加の傾向ありしも、大正十年には著しく低下し、人口千に付二十四人四分を以て最低の新記錄を示せり。内地人の死亡率は之を本島人に比すれば甚た低く、大正十一年には本島人二十六人七分なるに對し、内地人は僅かに十四人四分を示せり。

更に之を内地其の他と比較するに、大體に於て死亡率の最も低きは關東州にして北海道之に亞き、朝鮮は内地府縣と稍〻一致し、我臺灣は樺太と相似たる所あり。又列國中死亡率の最も高きは智利及西班牙等にして大正十年には智利三十三人六分、西班牙二十一人四分を示せり。

一　死亡率（人口千に付）

	平均	内地人	本島人	外國人
大正元年	二五・三	一五・八	二五・八	一五・四
同　二年	二五・三	一五・三	二五・八	一三・一
同　三年	二八・一	一五・〇	二八・七	一九・五

同　四年	三二・二	一七・三	三二・九	一九・四
同　五年	二九・二	一六・〇	二九・八	一六・八
同　六年	二七・五	一六・五	二八・〇	一七・七
同　七年	三四・八	一九・六	三五・五	二一・七
同　八年	二七・三	一六・八	二七・八	二〇・八
同　九年	三三・五	一九・一	三三・二	二三・三
同　十年	二四・四	一三・九	二五・〇	一九・六
同　十一年	二六・一	一四・四	二六・七	二三・三

二一　内地其の他との死亡率累年比較（人口千に付）

	臺灣	朝鮮	樺太	關東州	北海道	内地府縣
大正元年	二五三	一六・〇	三一・五	一八・九	二〇・八	一九・八
同　二年	二五・三	一八・〇	二八・五	一九・七	一九・四	一九・三
同　三年	二八・一	一九・三	二四・五	一九・八	二〇・四	二〇・四
同　四年	三二・二	二一・一	三二・九	一八・〇	一九・〇	二〇・〇
同　五年	二九・二	二三三	二八・五	一六・九	二〇・八	二一・四
同　六年	二七・五	二四・一	二七・一	二三・〇	二〇・五	二一・四
同　七年	三四・八	三〇・七	三六・二	二四・一	二四・九	二六・四
同　八年	二七・三	二三・九	三三一	二一・六	二一・九	二三・四
同　九年	三三・五	二三・四	三四・二	一五・八	二一・九	二四・六
同　十年	二四・四	一九・八	二五・七	一五・二	一八・二	二三・九
同十一年	二六・一	二一・四	二〇二	一八・四	?	?

一七　人口の増加

臺灣の人口は、明治三十八年十月一日施行の第一回戸口調査の結果に依れば、三百萬なりしもの大正元年には三百三十五萬に増加し、更に大正十一年には三百八十二萬に達し過去十一年間に一割四分の増加を示せり。

更に人口増加の趨勢を内地其の他と比較するに、増加の割合最も大なるは樺太にして、北海道之に亞き、關東州は第三位を占め、大正八年迄は臺灣と内地とは殆んど其の歩調を一にす。

一　最近十一箇年間の人口（各年末現在）

	總數	男	女	指數
大正元年	三、三五三、九四三	一、七六三、四八四	一、五九〇、四五九	一〇〇
同　二年	三、四一八、二七〇	一、七九四、八〇八	一、六二三、四六二	一〇二
同　三年	三、四六八、七一九	一、八一八、〇五六	一、六五〇、六六三	一〇三
同　四年	三、四八三、二七六	一、八一四、九四四	一、六六八、三三二	一〇四
同　五年	三、五一〇、一一〇	一、八二四、一五〇	一、六八五、九六〇	一〇五

同　六年	三,五六〇,〇五〇	一,八四六,四四五	一,七一三,六〇五	一〇六
同　七年	三,五八三,三九五	一,八五六,一七八	一,七二七,二一七	一〇七
同　八年	三,六三〇,三八五	一,八七八,八一〇	一,七五一,五七五	一〇八
同　九年	三,六七三,二九〇	一,九〇二,七九〇	一,七七〇,五〇〇	一一〇
同　十年	三,七五一,二一七	一,九四一,五八二	一,八〇九,六三五	一一三
同　十一年	三,八二一,五二八	一,九七四,八一四	一,八四六,七一四	一一四

蕃地居住の蕃人を除き、平地の蕃人は之を算入せり。

二　內地其の他との累年人口指數

（各年末現在）

	臺灣	朝鮮	樺太	關東州	北海道	內地府縣
大正元年	一〇〇	一〇〇	一〇〇	一〇〇	一〇〇	一〇〇
同　二年	一〇二	一〇四	一〇五	一〇三	一〇四	一〇一
同　三年	一〇三	一〇七	一三六	一〇四	一〇八	一〇三
同　四年	一〇四	一一〇	一四四	一〇八	一一〇	一〇四
同　五年	一〇五	一一三	一五七	一一一	一一四	一〇五

同　六年	一〇六	一一四	一七六	一一四	一二〇	一〇七
同　七年	一〇七	一一五	一八九	一一六	一二五	一〇六
同　八年	一〇八	一一六	二〇一	一二〇	一二九	一〇七
同　九年	一一〇	一一七	二二六	一二三	一三三	一〇六
同　十年	一一三	一一八	二四六	一三一	一四二	一〇七
同十一年	一一四	一一九	二八五	一三七	一四九	一〇九

一八　蕃人

臺灣の蕃人は之をタイヤル、サイセット、ブヌン、ツオウ、パイワン、アミ及ヤミの七種族に分つ。大正十一年末現在蕃社數は七百十四、戸數二萬二千五百二十四、人口十三萬二千人なるも、就中四萬八千八百三十六人は平地の蕃社に居住するか故に、實際蕃地に居住するものゝ數は八萬三千百六十四人なり。

各種族中人口最も多きはパイワン族にして總人口の三割一分六厘を占め、アミ族の二割八分六厘、タイヤル族の二割三分六厘等順次之に亞く。

	總數	男	女	百分比例
總數	一三二、〇〇〇	六五、八七三	六六、一二七	一〇〇・〇
タイヤル	三一、一〇一	一五、一七一	一五、九三〇	二三・六
サイセット	一、一五〇	五八二	五六八	〇・九
ブヌン	一六、六五六	八、五四一	八、一一五	一二・六
ツオウ	一、九七七	一、〇五二	九二五	一・五
パイワン	四一、六九三	二〇、八五二	二〇、八四一	三一・六

アトヤミ	三七、八〇八	一八、八二〇	一八、九八八	二八六
ヤミ	一、六二五	八三五	七九〇	一三

本表中、平地の蕃社に居住する蕃人四萬八千八百三十六人は本島人として人口統計に計上せらる。

一九　行政區劃

臺灣の地方行政區劃は、幾多の變遷を經たる後、大正九年九月一日に至り、地方官々制に根本的改正を加へたり。即ち從來の十二廳を五州二廳に改め、五州は之を三市四十七郡に分ち、郡の下には三十四街、二百二十六庄を置き、二廳は之を七支廳に分ち、支廳の下には二街一庄十九區を置き、以て從來の行政區域を全く一變したり。

	郡	支廳	市	街	庄	區
全島	四七	七	三	三六	二二七	一九
臺北州	九	—	一	六	三四	—
新竹州	八	—	—	四	三九	—
臺中州	一一	—	一	一〇	五〇	—
臺南州	一〇	—	一	八	五九	—
高雄州	九	—	—	六	四四	—
臺東廳	—	四	—	一	—	一一
花蓮港廳	—	三	—	一	一	八

本表は大正十三年十月末現在とす

二〇 州及廳の面積

五州二廳中、面積の最大なるは、臺中州の四百七十八方里餘にして、高雄、臺南、花蓮港、新竹、臺北の順序を以て之に亞ぎ、臺東廳は二百二十四方里を以て最小の地位を占む。

今之を內地府縣に比較すれば、臺中州は熊本、宮城の中間に、高雄州は山口、三重の中間に、臺南州は愛媛、千葉の中間に、花蓮港廳、新竹州及臺北州は和歌山、京都の中間に、臺東廳は鳥取、佐賀の中間に位す。

一 州及廳の面積

	方里	百分比例
全島	二、三三三・三九	一〇〇・〇
臺北州	二九六・〇三	一二・七
新竹州	二九八・一六	一二・八
臺中州	四七八・七二	二〇・五
臺南州	三五一・五一	一五・一

高雄州	三八三・〇七	一六・四
臺東廳	二二四・八三	九・六
花蓮港廳	三〇〇・一〇	一三・九

二 內地府縣との面積比較

	方里	順位
熊本縣	四八一・八九	一五
臺中州	四七八・七一	一六
宮城縣	四七二・四五	一七
山口縣	三九四・六四	二五
高雄州	三八三・〇七	二六
三重縣	三六九・七〇	二七
愛媛縣	三六九・五〇	二八
臺南州	三五一・五一	二九
千葉縣	三二九・二九	三〇

和歌山縣	三〇六・八五	三三
花蓮港廳	三〇〇・一〇	三四
新竹州	二九八・一六	三五
臺北州	二九六・〇二	三六
京都府	二九五・五六	三七
鳥取縣	二三六・九四	四七
臺東廳	二二四・八三	四八
佐賀縣	一五八・四三	四九

順位は、一道三府四十三縣及州、廳の面積の順位を示す。

二　州及廳の人口

五州二廳中、人口の最多なるは臺南州の九十九萬四千人にして、臺中州は八十三萬四千人を以て之に亞き、以下臺北、新竹、高雄、花蓮港、臺東の順序を以てし、一方里の人口は同しく臺中州二千七百八十四人を以て最高度を示し、花蓮港廳の百六十九人最も低し。

今之を内地府縣に比較すれは、臺南州は山口、山形の中間に、臺中、臺北の兩州は岩手、青森の中間に、新竹州は山梨、沖繩の中間に、高雄州は沖繩、奈良の中間に位し、花蓮港及臺東の兩廳は人口餘りに少くして比較すへき類似の府縣なし

一　州及廳の人口（大正十一年末現在蕃地居住の生蕃を含む）

	實數	百分比例	一方里に付
全島	三,九〇四,六九二	一〇〇・〇	一,六七四
臺北州	七八四,四四五	二〇・一	二,六五〇
新竹州	五九二,九二二	一五・二	一,九八九

臺中州	八三四、三八〇	二一・三	一、七四三
臺南州	九九四、二一一	二五・五	二、八三一
高雄州	五八七、一六〇	一五・〇	一、五三三
臺東廳	五〇、二九三	一・三	二三四
花蓮港廳	六一、三八二	一・六	二〇四

二　內地府縣との人口比較（內地府縣は大正十一年十月一日現在）

	人口
山口縣	一、〇五三、九〇〇
臺南州	九九二、九二一
山形縣	九八三、四〇〇
岩手縣	八六四、三〇〇
臺中州	八三四、三八〇
臺北州	七八四、四四五
青森縣	七七三、三〇〇
山梨縣	五九六、三〇〇
新竹州	五九二、九二一
沖繩縣	五八九、〇〇〇
高雄州	五八七、一六〇
奈良縣	五六九、六〇〇
花蓮港廳	六一、三八二
臺東廳	五〇、二九三

二三　主要都市

臺灣には三市、三十六街あり、就中人口二萬以上の市及街は二十にして、その第一位を占むるは臺北市の十八萬三百、之に亞ぐは臺南市の八萬一千五百、基隆街の五萬三千八百、嘉義街の四萬一千、高雄街の三萬八千五百、臺中市の三萬六千四百、新竹街の三萬五千百等なり。而して東部に於ける廳所在地たる臺東街は僅かに七千五百、同しく花蓮港街は六千九百を有するのみなり。

次に州及廳の所在地たる三市、四街を內地其の他の都市に比較するに大正九年十月一日現在に依れは、我か臺北市は東京、大阪、神戶、京都、名古屋、橫濱、京城、長崎の八市に亞ひて實に第九位を占め、廣島市の上に位し、臺南市は平壤及釜山と伯仲して和歌山、靜岡兩市の中間に、高雄街は若松(福島)松江兩市の中間に、臺中市は四日市、小倉兩市の中間に、新竹街は小倉、佐賀兩市の中間に位す。而して臺東、花蓮港の兩街は共にその人口樺太の首府豐原よりも少し。

一　主要都市の人口　(大正十一年末現在)

欠

	總數	內地人	本島人	外國人	順位
臺北市(臺北州)	一八〇、三六二	四九、八九四	一二九、一八八	一一、二八〇	一
臺南市(臺南州)	八一、五九四	一三、六五〇	六五、四〇〇	二、五四四	二
基隆街(臺北州)	五三、八〇八	一三、三八九	三七、七四六	二、六七三	三
嘉義街(臺南州)	四一、〇一七	六、一七八	三四、〇三三	八〇六	四
高雄街(高雄州)	三八、五七一	一〇、二一六	二七、五三三	八二三	五
臺中市(臺中州)	三六、四四五	九、九〇九	二五、八五九	六七八	六
新竹街(新竹州)	三五、一六一	三、五三二	三一、二三三	四一八	七
鹿港街(臺中州)	三一、四四九	二五四	三〇、九八一	二一四	八
大溪街(新竹州)	二五、八一八	四一五	二五、三五三	五〇	九
斗六街(臺南州)	二五、七〇三	八七一	二四、七二七	一〇五	一〇
清水街(臺中州)	二五、一九〇	三五八	二四、七九八	三四	一一
麻豆街(臺南州)	二三、九八七	四八八	二三、四六七	三二	一二
屏東街(高雄州)	二三、三二一	二、九三九	一九、八九四	四七八	一三
埔里街(臺中州)	二三、〇七九	一、三五五	二一、四八四	二四〇	一四

檳榔	一八九、八二六	〇・一	六四六	四、九九〇、四三三個
鳳梨	二七二、一三二	〇・二	一、一三七	九、〇五三、九〇七斤
檨仔	一四三、四二四	〇・一	六七五	四、五五八、六六二
李	一〇〇、〇七一	〇・一	三三九	四、二八九、七一八
蔬菜	六、四七五、三八二	四・一	—	—
其他	一五四、九三〇	〇・一	—	—
蠶繭	四四、八四五	〇	—	—

欠

二七　畜産

臺灣の畜産物生産總價額は大正十一年に三千萬圓を算し、內家畜生産二千五百萬圓、家禽生産四百萬圓、牛乳三十萬圓なり。

家禽生産中、豚は二千三百萬圓を以て第一位を占め、水牛の百三十萬圓之に亞き、家禽生産中第一位を占むるは鷄の三百二十二萬圓なり。

	生産價額	生産價額百分比例
總額	二九、一八六、三三九円	一〇〇・〇
家畜	二四、七八二、〇八四	八四・九
水牛	一、三九八、九三八	四・五
黃牛	三八八、四〇三	一・三
其他牛	七三、六六一	〇・三
豚	二二、六五五、三三四	七七・六
山羊	三三〇、七四六	一・一
其他	三五、〇一三	〇・一

家禽	四、〇九九、三六三	一四・〇
鷄	三、三一八、七四三	一一・〇
鶩	六七三、六六一	二・三
鵞	二〇三、四〇〇	〇・七
七面鳥	五、五五九	一 〇
牛乳	三〇四、七九三	一・一

二八 林産

臺灣の林産物生産總價額は大正十一年に一千百萬圓を算し、内官行生産額三百六十萬圓、一般生産額七百五十六萬圓なり。

官行生産額中第一位を占むるは丸太の二百三十萬圓にして、一般生産額中にては薪の二百七十五萬圓第一位を占む。

	價額	百分比例
總額	一一、二六九、九八八円	一〇〇・〇
官行生産額	三、六〇五、一九〇	三二・三
丸太	二、三〇九、〇五〇	二〇・七
製材	一、二三五、二八九	一一・一
副生品	六〇、八五〇	〇・五
一般生産額	七、五六四、七九八	六七・七
木材	一、九一一、四二〇	一七・一
竹材	九五一、三〇七	八・五

籐	一六〇、〇九五	一・四
木炭	八六五、九二四	七・七
薪	二、七五三、六二三	二四・六
筍	八四九、四四六	七・六
蓪草	三七、五七四	〇・三
薯榔	二七、六七八	〇・三
姜黄	一七、七三一	〇・二

官行生產額には營林所に於ける賣拂額を揭上す。

二九　鑛產

臺灣の鑛產總價額は大正十一年に一千三百萬圓を算し、內石炭は總生產價額の約八割、即ち一千五十萬圓を以て第一位を占め、金は九十萬圓を以て之に亞き、銅の七十萬圓、石油の二十一萬圓等順次之に亞く。

	產額	價額	價額百分比例
總額	—	一三,五七三,三六三圓	一〇〇・〇
石炭(噸)	一,三四七,四四九	一〇,五一四,〇〇三	八三・六
金(匁)	一八〇,三三五	九〇一,六八一	七・二
銅(斤)	一,八二五,八四六	六九二,九一〇	五・五
石油(石)	一一,五二一	二一三,七六一	一・七
金銅鑛(貫)	三三一,七九一	三七,三八一	〇・三
銅鑛(貫)	一,三七〇,六四一	八八,六三五	〇・七
硫黃(斤)	五,四六七,六一三	八〇,五三六	〇・六
銀(匁)	一九四,五三五	三一,一七九	〇・二
砂金(匁)	一,九九三	七,三〇一	〇・一
砂鐵(斤)	一四〇,三九四	五,九七七	〇・一

三〇 水產

臺灣の水產總價額は大正十一年には一千百萬圓以上に達し、內水產漁獲物六百萬圓、養殖場漁獲物二百萬圓、水產製造物二百二十萬圓、製鹽七十八萬圓なり。

更に之を品目別に見れは、鰹節の百五十萬圓第一位を占め、加蚋魚（タヒ）の百十一萬圓、虱目魚（サツバクヒイ）の百十萬圓、卓鮘（カツヲ）の八十萬圓、鮪仔（マグレ）の七十萬圓等順次之に亞く。

	價額	百分比例
總額	円 一一、〇九五、九二四	一〇〇・〇
水產漁獲物	五、九八八、〇九七	五四・〇
加蚋魚（タヒ）	一、一一二、一九〇	一〇・〇
卓鮘（カツヲ）	八〇一、三三三	七・三
鰮仔（イワシ）	五六八、四九九	五・一
沙魚（フカ）	三五九、三六六	三・二
烏魚（ボラ）	一六九、〇五一	一・五
塗托（サワラ）	一三五、三九九	一・二

鮪(マグロ)仔	六九八、七三七	六・三
其他	二、一四三、五三三	一九・四
養殖場漁獲物		
虱(サツ)目(バク)魚(ヒイ)	二、一三〇、〇八五	一九・二
鰱(レン)魚(ヒイ)	一、一〇九、一三六	一〇・〇
草(ツァウ)魚(ヒイ)	二三四、一一五	二・〇
蚵(オヲア)仔(カキ)	一六六、四四四	一・五
烏(オオヒイ)魚(ボラ)	三六三、六四六	三・四
鯱(タイヒイ)魚(コヒ)	一三五、九一七	一・一
其他	八〇、八二四	〇・七
水產製造物	五〇、〇三三	〇・五
鰹節	二、二〇〇、一九一	一九・八
煮干鰮	一、四九〇、三四九	一三・三
蒲(カ)鉾(ミ)	三七三、一六一	三・四
鰮(ラス)仔	一〇九、七八五	一・〇
	二九、八〇六	〇・三

鱶鰭	八三、五七三	〇・八
其他	一二四、六一六	一・〇
製鹽	七七七、五四一	七・〇

三　工産

臺灣の工業總生産價額は、大正十一年に二億一千五百萬圓を算し、內砂糖の一億二千萬圓は群を拔いてその第一位を占め、籾摺の二千五百萬圓、酒精の千六百萬圓、精米の千三百萬圓、再製茶の九百萬圓等順次之に亞ぐ。

	生産價額	百分比例
總額	円 二一五,八五一,三四七	一〇〇·〇
砂糖	一一九,四七一,六七五	五五·三
籾摺	二五,三〇五,四二四	一一·六
精米	一三,一九九,四七六	六·一
酒精	一六,一四五,三一六	七·四
再製茶	九,二九八,九九四	四·三
鐵工及鑄物等	三,一九九,三五八	一·五
木製品	二,七八七,五二七	一·三
セメント	三,五九六,三三三	一·七

染色	二、〇六八、八七三	一・〇
麺類	二、〇一三、六五四	〇・九
煉瓦	一、七五六、〇三三	〇・八
調合肥料	一、六九三、七七〇	〇・八
金銀細工	一、三六八、一〇三	〇・六
味噌及醤油	一、六三八、三五〇	〇・八
油及油糟	二、二八七、九八九	一・一
石灰	三五三、一三六	〇・二
敷瓦及屋根瓦	一、〇七六、七八八	〇・五
金銀紙	八八六、八三四	〇・四
製紛	一、六九八、三三八	〇・八
其他	六、二二五、五九八	二・九

三一　工　業

三二 糖業

臺灣の糖業は大正十二年期に於て、公稱資本額二億七千萬圓、作業工場數百五十六、許可作業能力三萬六千四百八十噸を有し、其の製糖高五億九千二百萬斤に達す。就中新式製糖會社の數は十三にして作業工場數四十四、許可作業能力三萬四千六百五十噸を有し、その製糖高五億八千百萬斤を算す。

	公稱資本金	作業工場數	許可作業能力	製糖高	製糖高百分比例
總數	二七一,二〇〇,〇〇〇円	一五六	三六,四八〇噸	五九二,二四一,〇〇一斤	一〇〇・〇
新式製糖會社	二七一,二〇〇,〇〇〇	四四	三四,六五〇	五八一,三八〇,九七五	九八・二
臺灣製糖	六三,〇〇〇,〇〇〇	一〇	八,七八〇	一三三,二〇三,六七〇	三三・五
東洋製糖	三六,二五〇,〇〇〇	六	四,四五〇	七九,〇五一,五五三	一三・三
明治製糖	三七,五〇〇,〇〇〇	五	五,一〇〇	八九,二四四,七五五	一五・一
帝國製糖	一八,〇〇〇,〇〇〇	五	三,〇〇〇	六〇,一三八,四〇〇	一〇・二
新高製糖	二八,〇〇〇,〇〇〇	三	三,〇五〇	四八,二一六,〇五〇	八・一
鹽水港製糖	二五,〇〇〇,〇〇〇	六	四,五〇〇	六八,〇五六,八六三	一一・五

大日本製糖	二七,二五〇,〇〇〇	二	二,二〇〇	六一,四七八,一〇〇	一〇・四
臺南製糖	二〇,二五〇,〇〇〇	二	一,一七〇	六,五二一,六五八	一・一
新竹製糖	一七,五〇〇,〇〇〇	一	五〇〇	二,三一〇,二〇〇	〇・四
林本源製糖	三,〇〇〇,〇〇〇	一	七五〇	二〇,二二九,〇五〇	三・四
沙轆製糖	二,五〇〇,〇〇〇	一	三〇〇	四,一〇五,九〇〇	〇・七
臺東製糖	一,七五〇,〇〇〇	一	三五〇	二,一九九,九七六	〇・四
新興製糖	一,二〇〇,〇〇〇	一	五〇〇	六,六二五,八〇〇	一・一
改良糖廍	—	二一	八二〇	三,七六六,七五二	〇・六
舊式糖廍	—	一〇一	一,〇一〇	七,〇九三,二七四	一・二

大正十二年期とは大正十一年十一月より同十二年十月に至る期間を云ふ。

三　貿易

臺灣の貿易は之を外國貿易及內地貿易（臺灣內地間貿易）の二種に分つへきも、今之を總括すれは明治三十年の三千一百萬圓より大正元年の一億二千五百萬圓に進みたり。然るに大正二、三の兩年は砂糖の減產と一般商況の不振に依り少しく減退したるも大正五年には世界大戰の影響を受けて、一億七千七百萬圓に達し、大正六年には二億圓臺に上り、大正八年には更に三億圓臺を突破し、翌大正九年には三億八千九百萬圓と云ふ新記錄を作り、之を大正元年に比すれは實に二十一割の增加にして、人口一人當百六圓を算す。然るに大正十年及同十一年には世界經濟界の不況に伴ひ再ひ二億七、八千萬圓に減退し、人口一人當も亦七十二—六圓に下れり。

次に貿易總額に對する內外兩貿易の割合を觀るに內地貿易は常に過半數を占め少きも七割、多きは七割八分に達す。

一　貿易總表

	總額	指數	外國貿易	內地貿易	百分比例 外國貿易	百分比例 內地貿易	平均一人當
大正元年	一二五,四三四千円	一〇〇	三四,二六七千円	九一,一六七千円	二七·三	七二·七	三七·四円
同 二年	一一四,二四八	九一	三〇,九六六	八三,二八二	二七·一	七二·九	三三·四
同 三年	一一一,六三三	八九	二五,九九六	八五,六三七	二三·三	七六·七	三三·二
同 四年	一二九,〇三三	一〇三	二八,二一二	一〇〇,八二一	二一·九	七八·一	三七·〇
同 五年	一七七,三七〇	一四一	四七,〇八三	一三〇,二八七	二六·五	七三·五	五〇·五
同 六年	二三四,六九一	一八七	六一,三一五	一七三,三七六	二六·一	七三·九	六五·九
同 七年	二四三,五七六	一九四	六六,九四九	一七六,六二七	二七·五	七二·五	六八·〇
同 八年	三三二,五三六	二六五	九九,七五五	二三二,七八一	三〇·〇	七〇·〇	九一·六
同 九年	三八八,七〇二	三一〇	九五,五四〇	二九三,一六二	二四·六	七五·四	一〇五·八
同 十年	二八六,三九三	二二八	六三,九七五	二二二,四一八	二二·三	七七·七	七六·三
同 十一年	二七六,九六〇	二二一	六七,四八五	二〇九,四七五	二四·四	七五·六	七二·五

二 外國貿易

	總額	指數	輸出	輸入	輸入超過
大正元年	三四,二六七千円	一〇〇	一四,九六〇千円	一九,三〇七千円	四,三四七千円
同 二年	三〇,九六六	九〇	一二,九四二	一八,〇二四	五,〇八一
同 三年	二五,九九六	七六	一二,九八二	一三,〇一四	三二
同 四年	二八,二一二	八二	一五,四三〇	一二,七八二	(一)二,六四八
同 五年	四七,〇八三	一三七	三一,六五三	一五,四三〇	(一)一六,二二三
同 六年	六一,三一五	一七九	四〇,二一六	二一,〇九九	(一)一九,一一六
同 七年	六六,九四九	一九五	三三,三九四	三三,五五五	一六一
同 八年	九九,七五五	二九一	三五,六二二	六四,一三三	二八,五一〇
同 九年	九五,五四〇	二七九	三五,一七三	六〇,三六七	二五,一九四
同 十年	六三,九七五	一八七	二三,五四二	四〇,四三三	一六,八九一
同 十一年	六七,四八五	一九七	三〇,五六三	三六,九二二	六,三五八

(一)は輸出超過なり。

三 內地貿易

	總額（千円）	指數	移出（千円）	移入（千円）	移出超過（千円）
大正元年	九一,一五七	一〇〇	四七,八三二	四三,三三五	四,五〇六
同二年	八三,二八二	九一	四〇,四四七	四二,八三六	(一)二,三八九
同三年	八五,六三七	九四	四五,七三八	三九,八九九	五,八四〇
同四年	一〇〇,八二一	一一一	六〇,一九三	四〇,六二八	一九,五六五
同五年	一三〇,二八七	一四三	八〇,六九五	四九,五九二	三一,一〇四
同六年	一七三,三七六	一九〇	一〇五,五八八	六七,七八八	三七,八〇〇
同七年	一七六,六二七	一九四	一〇五,九六二	七〇,六六五	三五,二九七
同八年	二三二,七八一	二五五	一四二,二〇八	九〇,五七二	五一,六三六
同九年	二九三,一六二	三二二	一八一,〇九二	一一二,〇七〇	六九,〇二二
同十年	二二二,四一八	二四四	一二八,八九七	九三,五二一	三五,三七六
同十一年	二〇九,四七五	二三〇	一二七,三〇一	八二,一七三	四五,一二八

(一)は移入超過なり。

三四　對手國別外國貿易

臺灣の外國貿易は大體に於て輸入超過を示す。而して對手國中支那は累年主要の地位に在り、即ち輸出貿易總額に對する其の割合は少きも二割八分五厘、多きは四割四分を占め、輸入貿易に於ては更にその割合大にして、少きも三割四分、多きは四割九分を占む。

今大正十一年の外國貿易に就て觀るに、貿易總額六千七百萬圓中、輸出額は三千萬圓にして、就中支那の一千萬圓最も多く、總額の三割四分に當り、北米合衆國の七百七十萬圓、香港の四百三十萬圓、蘭領印度の三百三十萬圓等順次之に亞ぐ。輸入額三千七百萬圓中第一位を占むるは支那の一千八百二十萬圓にして、總額の四割九分に當り、蘭領印度の三百五十萬圓、北米合衆國の三百三十萬圓、關東州の三百萬圓、英吉利の百五十萬圓、英領印度及海峽植民地の百二十萬圓等順次之に亞ぐ。

一　輸出

	大正十一年	同十年	同九年	同八年	同七年	同六年	同元年
	千円	千円	千円	千円	千円	千円	千円
總額	三〇,五六三	二三,五四二	三五,一七三	三五,六〇三	三三,三九四	四〇,二二六	一四,九六〇
支那	一〇,三〇〇	九,一七八	一一,八九三	一三,一〇八	一四,六三八	一四,三九九	四,三六四
北米合衆國	七,六九一	三,三三一	六,八三三	七,〇一一	七,七三三	五,五二八	四,九一七
香港	四,三三三	四,五六九	六,〇三三	五,三三五	四,七八四	八,一四三	三九三
蘭領印度	三,三九四	三,〇六五	二,八九一	一,八五五	二,二一八	二,二七七	三
佛蘭西	三四二	二一二	三八五	三四三	一〇一	八九	六八二
英吉利	一,〇三三	二〇五	一,三五九	九九〇	六四〇	七五〇	一,〇八七
比律賓諸島	四三一	四四五	二,〇一三	一,七〇六	二〇五	八〇	五二
關東州	六二一	二五八	三四	七三一	一,〇三五	一,四八七	一三
英領印度及海峽植民地	三三〇	三五六	六六二	五一六	九九	六二四	三四五
其他諸國	二,三〇九	一,九二三	三,〇八一	五,〇三七	一,九六二	六,八三九	三,一八五

二　輸入

	大正十一年	同十年	同九年	同八年	同七年	同六年	同元年
	千円	千円	千円	千円	千円	千円	千円
總額	三六,九二三	四〇,四三三	六〇,三六七	六四,一三三	三三,五五五	二一,〇九九	一九,三〇七
支那	一八,二三九	一九,四六五	二八,七三四	二八,六七三	一五,九六〇	九,三九八	六,七六七
蘭領印度	三,五〇一	六,五八八	一〇,三五七	四,四〇七	二,一八八	三四六	三〇七
北米合衆國	三,三〇一	四,九六九	五,五六七	三,四四三	二,三〇二	二,一四八	一,七〇〇
英領印度及海峽植民地	一,一三一	一,七七六	二,〇四二	三,七一八	四,三二八	三,九七七	二,三二九
關東州	三,〇六三	一,七六五	四,四八一	三,七七二	二,一七九	八七二	一,一五八
波斯	五六六	九三八	二,九九四	三,三〇一	一,七二四	一,五九二	一,四三五
英吉利	一,四六五	一,九八九	九二八	一,五七五	八八七	一,〇七八	三,四九〇
佛領印度	二〇一	五四五	三三九	一,三三二	二,九四二	八五九	三三九
暹羅	二四五	三七一	二四九	二六九	三三〇	二三三	一〇二
其他諸國	五,一〇九	二,〇二七	四,六七六	一三,六四二	七一五	六〇六	一,六九〇

三五　支那香港及南洋貿易

臺灣の外國貿易中、臺灣と最も密接の關係を有する支那香港及南洋との貿易を再檢するに、年に依り多少の相異あるも、大體に於て常に重要の地位を占む。即ち大正十一年に就て觀るに、輸出額は一千九百七十萬圓にして、輸出貿易總額の六割四分四厘を占め、輸入貿易は二千四百萬圓にして、輸入貿易總額の六割四分六厘に當れり。

一　輸出

	大正十一年 千円	同十年 千円	同九年 千円	同八年 千円	同七年 千円	同六年 千円	同元年 千円
總額	一九、六九七	一八、七五九	二四、一七五	三三、四一〇	三三、六四一	二七、〇一七	五、一四八
支那	一〇、三〇〇	九、一七八	一二、八九三	一三、一〇八	一四、六三八	一四、三九九	四、二六四
香港	四、三二三	四、五六九	六、〇二三	五、三三五	四、七八四	八、一四三	三九三
南洋	五、〇七四	五、〇二三	六、二五九	四、九六七	三、二一九	四、四七五	四九一

本表の南洋とは英領海峽植民地、英領ボルネオ、蘭領印度、比律賓、英領印度、佛領印度、暹羅及濠太剌利を謂ふ、以下同し。

二　輸入

	大正十一年	同十年	同九年	同八年	同七年	同六年	同元年
	千円	千円	千円	千円	千円	千円	千円
總額	二三,八四八	二九,二四七	四二,三五〇	三八,八五五	二五,八五二	一四,八九三	九,九四二
支那	一八,二三九	一九,四六五	二八,七三四	二八,六七三	一五,九六〇	九,三九八	六,七六七
香港	七一	二一四	七七	八五	六〇	六二	一一九
南洋	五,五三八	九,五六八	一三,五三九	一〇,〇九七	九,八三二	五,四三三	三,〇五六

三　比例

	外國貿易總額に對する割合 輸出	外國貿易總額に對する割合 輸入	支那香港南洋貿易總額に對する百分比例 輸出	支那香港南洋貿易總額に對する百分比例 輸入
總額	六四・四	六四・六	一〇〇・〇	一〇〇・〇
支那	三三・七	四九・四	五二・三	七六・五
香港	一四・一	〇・二	二一・九	〇・三
南洋	一六・六	一五・〇	二五・八	二三・二

三六　重要品別外國貿易

臺灣の外國貿易中輸出品の主要なるものは茶、砂糖、石炭、樟腦、燐寸、綿織物等なり。今大正十一年に就て之を觀るに茶は九百五十五萬圓を以て第一位を占め、石炭の五百七十二萬圓、樟腦の四百四十二萬圓、砂糖の二百八十三萬圓、綿織物の百十七萬圓等順次之に亞く。

次に輸入品の主要なるものは豆油糟、砂糖、阿片、米、木材及板、石油、包蓆、豆類等にして、大正十一年には豆油糟の七百八十萬圓第一位を占め、砂糖の六百萬圓、豆類の二百九十萬圓　木材及板の二百十五萬圓、包蓆の百七十萬圓、阿片の百七十萬圓、石油の百三十七萬圓等順次之に亞く。

一　輸　出

	大正十一年	同十年	同九年	同八年	同七年	同六年	同元年
茶	千円 九,五五二	千円 七,九四五	千円 六,四〇〇	千円 八,二〇九	千円 八,六六三	千円 四,五四七	千円 六,六七四
砂糖	二,八〇二	二,三二五	六,九六七	七,五八六	六,二四四	一五,七七五	一,七一九

石炭	五、七一九	六、五八二	八、九八二	八、〇三七	二、八九四	一、八二三	一一八
樟腦	四、四一八	二八〇	四、三三五	三、〇七四	二、九四二	四、六二九	四、五〇〇
燐寸	二六八	五四五	一、三六四	二、一一五	二、五六五	一、七八九	一一八
綿織物	一、一六七	一、三〇三	二、一七一	一、一三〇	一、五九三	一、四六三	九九
乾魚及鹹魚	五九六	九一七	七八五	六一一	一、〇二〇	一、七一一	一五七
苧麻	四〇六	四三五	六五八	六八二	五五一	五七〇	三七九
酒精	六五二	五七一	三一	三五七	八九七	七五六	二四
龍眼	一三五	一二五	一四五	一二〇	七〇〇	三二八	二三四
鰑及乾烏賊	五四	六三	一一八	七六	三四九	六三四	四五

二　輸入

	大正十一年 千円	同十年 千円	同九年 千円	同八年 千円	同七年 千円	同六年 千円	同元年 千円
豆油糟	七、八三三	六、二五四	一三、二九八	一〇、一一三	五、九七三	四、四五三	一、九一七
砂糖	六、〇九九	五、三七七	一一、〇九九	一五、五七四	一、六八六	一一	一四八
阿片	一、六六九	一、五〇五	六、〇六二	六、四三四	四、五五四	三、八五八	三、〇九四

米	四五〇	一、三三一	三、九三八	七、四〇九	五、一三九	四三〇	一、一五四
木材及板	二、一四六	二、二四八	二、六〇三	一、七七五	一、〇五八	六七九	七〇五
石油	一、三七四	一、九四七	一、九二一	二、三三六	一、二七三	八三〇	七五六
包蓆	一、六五九	五七五	一、三五三	二、四六八	一、九三七	一、七四二	四九七
煙草	九〇一	八五七	一、七三四	一、六七九	一、二九四	三三二	九〇七
豆類	二、九〇八	一、四九三	一、八四四	九四〇	四四二	一一三	三二九
紙	八六三	一、二七六	一、一八七	七九七	六三二	五一〇	五九四
綿織物	五九四	五九九	三八八	八八五	五一五	六〇五	一、二〇六
小麥粉	九二	一、〇一一	二二六	二、三三六	三六七	—	一三九
鐵	一三七	三六八	一七四	九二八	一、一〇五	一、〇八七	三二四
ガンニー嚢（袋共）	三二九	三九五	七二六	四三四	一、〇三七	一、一九〇	一〇〇
麻織物	四三三	六七三	七九四	七三一	四〇三	二九〇	一九四

三七　重要品別內地貿易

臺灣の內地貿易中移出品の主要なるものは、砂糖、米、酒精、樟腦及樟腦油、芭蕉實(バナナ)・銅・鰹節等なり。今大正十一年に就て之を觀るに、砂糖は八千四百五十萬圓を以て第一位を占め、米の一千三百六十萬圓、芭蕉實の六百九十萬圓、樟腦及樟腦油の四百萬圓、銅の二百萬圓、鰹節の百八十四萬圓、酒精の百八十萬圓等順次之に亞く。

次に移入品の主要なるものは、綿織及絹織布、各種機械及同部分品、肥料、鹹魚及乾魚、鐵、酒類、木材及板材、建築材料等にして、大正十一年には綿織及絹織布六百四十萬圓を以て第一位を占め、各種機械及同部分品の五百五十六萬圓、酒類の五百五十五萬圓、各種肥料の四百四十萬圓、鐵の四百三十萬圓、鹹魚及乾魚の四百二十萬圓、木材及板材の二百九十萬圓等順次之に亞く。

一　移　出

	大正十一年	同十年	同九年	同八年	同七年	同六年	同元年
砂糖	八四,四六九 千円	八四,七〇九 千円	一三五,二三四 千円	七九,一一三 千円	五四,六四二 千円	六八,三四五 千円	二八,一三四 千円
米	一三,五八二	一九,二九四	一七,一一八	三四,四九二	二四,八三二	一三,六一八	一〇,三五七
酒精	一,七八七	五,八〇一	九,九六三	一三,四四九	一〇,七九九	八,五六七	一,五七九
樟腦及樟腦油	四,〇八〇	三,四九四	四,八四九	三,七四〇	三,〇九〇	二,八六〇	二,五七〇
芭蕉實	六,八七六	四,一五六	一,八〇六	二,〇三〇	二,〇一五	一,六〇一	三三七
銅	二,〇七八	一,六五八	九九七	九三七	七六四	一,五九二	二,〇九三
茶	一四〇	三五八	二九三	三〇三	一,一九六	三,七九四	一五四
木材及板材	一,七五三	五八六	一,四六八	五七一	六五三	八一四	六七
鰹節	一,八四五	一,二〇八	八五四	七七四	七二〇	二八七	二九
石炭	一,七九〇	五七九	一,六一八	九五一	一六八	二五一	—
鳳梨鑵詰	八六〇	八六五	八四〇	五一九	三八四	二六九	一三
麻織物	六五三	七一九	四九四	二七五	四六一	二七三	—
生皮	一四八	二〇三	三六七	三九三	四七六	四九一	二〇九

二 移入

	大正十一年	同十年	同九年	同八年	同七年	同六年	同元年
綿織及絹織布	六,四二二 千円	七,七三七 千円	六,〇三九 千円	八,一一三 千円	六,七五八 千円	六,六〇八 千円	五,〇一六 千円
各種機械及同部分品	五,五五九	八,六七一	一一,七四四	八,五三八	五,六六五	三,四九六	一,七一四
各種肥料	四,四一四	四,三五六	七,九六二	六,五〇五	四,五三八	六,〇九八	一,五二四
鹹魚及乾魚	四,一八二	四,九二一	六,四三三	六,八一四	三,八〇一	五,一二六	三,〇五四
鐵	四,二六二	六,〇三一	五,九〇九	四,二四〇	四,九四三	四,四七〇	一,八八〇
酒類	五,五四八	六,一一五	四,八六五	五,一一八	二,七六七	二,三八八	一,九八六
木材及板材	二,八九五	四,四〇〇	七,七三二	二,二五二	三,一〇〇	二,〇三三	三,四七一
建築材料	二,五二〇	三,三〇〇	五,六八二	二,八八九	二,四九五	一,九六六	七七四
穀粉及澱粉	二,四三三	一,八四一	二,八七〇	一,三七二	二,一〇八	三,〇一八	一,七八七
燐寸	一,三三八	一,五七八	一,八六三	二,六六九	三,一三三	二,一九八	四八二
紙	二,一一七	二,三六四	二,六二〇	二,三三三	一,六五〇	一,三八一	八三八
米	五,七二三	一,六八〇	一,四一七	一,三八一	二,一八七	一,八〇三	一,〇一八

鐵製品	一,三〇〇	一,一〇一	一,九九六	一,九〇七	一,六九三	一,三六三	五〇七
煙草	一,七二五	二,二三九	一,五四二	一,〇九六	八九六	六九四	六六三
セメント	四二九	一,四三三	一,四二三	五八五	四〇三	一,三〇七	一,二四六

三八　港別貿易

大正十一年に於ける臺灣の輸移出入貿易總額二億七千七百萬圓を港別に觀れは、基隆の一億五千萬圓第一位を占め、總額の五割四分一厘に當り、高雄の一億一千萬圓之に亞て三割八分六厘を占め、安平の八百八十四萬圓、淡水の二百九十萬圓を始め殘餘の諸港は之を合算するも向ほ僅かに總額の八分八厘を占むるに過きす。

今之を內地其の他の諸港に比較するに、基隆は橫濱、神戶、大阪、大連に亞て第五位を占めて釜山の上に位し、高雄は釜山と仁川の中間に在りて第七位を占む。更に安平は函館と敦賀との中間に、淡水は伏木と青森との中間に位ひす。

	總額	輸出	輸入
橫濱	一、五四七、六一七千円	八九五、四〇三千円	六五二、二一四千円
神戶	一、一三六、一七九	二七九、八二二	八五六、三五七
大阪	四五一、五六九	三二二、七七五	一二八、七九四
大連	二一二、七〇四	一二六、六九一	八六、〇一三

基隆	一四九、八五五	一七五、〇四三	七四、八一三
釜山	一一三、五四四	五八、二一〇	一五五、三三四
高雄	一〇九、九三七	七九、六五七	三〇、二六九
仁川	一〇一、九八八	四三、三六六	五八、六二三
函館	九、〇一一	五、七三五	三、二七六
安平	八、八四三	七〇五	八、一三八
敦賀	七、一六五	二、三八五	四、七八〇
伏木	三、一六四	六〇九	二、五五五
淡水	二、八九七	六四〇	二、二五七
青森	二、三三五	一一五	二、二一〇

臺灣及朝鮮の輸出中には移出を、輸入中には移入を含む。

三九　財政

臺灣總督府特別會計か全く國庫の補助を受けすして、獨立の實を擧くるに至りしは、明治三十八年度なりき。而して同年度の歲入は僅かに二千五百萬圓に過きさりしか、爾來年々共に其の額を增大し、大正八年度には一億圓を突破し、大正九年度には一億一千九百萬圓を以て新記錄を作りたり。然るに大正十年度よりは更に減退を示し、大正十二年度には九千九百八十萬圓を豫算せり。

次に歲入中其の主要部分を占むるは官業及官有財產收入にして、其の歲入總額に對する割合は年に依り多少の高低あるも、少きは三割九分、多きは六割九分を占む。歲出は明治三十八年度の二千萬圓より、大正八年度の七千二百萬圓に增加し、更に大正九年度には九千五百萬圓に達し、大正十年度には少しく減退を示したるも、大正十一年度には九千六百萬圓に增額し大正十二年度には歲入と同しく九千九百八十萬圓を豫算せり。

	歲入				指數	歲入百分比例			歲出	指數
	總額	租稅	官業及官有財產收入	其他		租稅	官業及官有財產收入	其他		
明治三十八年度	千円 二五,四一四	千円 七,三八五	千円 一三,九二九	千円 四,一〇一	100	二九·一	五四·八	一六·一	千円 二〇,四四三	100

大正元年度	六〇、二九六	一三、四九四	二四、七三〇	二二、〇七三	二三七	二二・四	四一・〇	三六・六	四七、一八九	三三一
同六年度	六五、四二五	九、九六九	三六、九五七	一八、四九九	三〇一	一五・二	五六・五	二八・三	四六、一六七	三三六
同七年度	八〇、五〇一	一一、三四六	三九、六八八	二九、四六六	三一七	一四・一	四九・三	三六・六	五五、三三五	二七一
同八年度	一〇〇、一六六	一五、二三〇	四五、六二九	三九、三〇七	三九四	一五・二	四五・六	三九・二	七二、三三三	三五四
同九年度	一二九、一四八	二四、三〇二	五一、八四六	四三、〇〇〇	四六九	二〇・四	四三・五	三六・一	九五、三三四	四六六
同十年度	一一二、〇三六	二一、二三九	四三、九六五	四六、八三二	四四一	一九・〇	三九・二	四一・八	九四、五二〇	四六二
同十一年度	一一三、四二二	一九、〇一七	五九、六五七	三四、七四九	四四六	一六・八	五二・六	三〇・六	九六、三四七	四七一
同十二年度	九九、八八四	一四、七九四	六八、九一四	一六、一七六	三九三	一四・八	六九・〇	一六・二	九九、八八四	四八九

本表中大正十年度迄は決算、大正十一年度は現計、大正十二年度は豫算なり。

四〇 專賣

臺灣の專賣は現在阿片、食鹽、樟腦、煙草及酒の五種なるか、就中酒は大正十一年七月以降の實施さす。今最近十一年間に於ける專賣の賣渡價額を觀るに、大正元年度に千七百萬圓なりしものか、大正六年度には二千萬圓を超ゆるに至り、更に大正九年度には三千萬圓を突破したるも翌大正十年度には經濟界の世界的不況に伴ひ樟腦の如きは特に前年度の九百萬圓より三百萬圓に減退したる爲め、總額も二千三百萬圓に低下したりしも大正十一年度には稍〻景況を囘復し總額二千六百萬圓に達せり。

	總額	阿片烟膏	食鹽	樟腦	煙草	指數
大正元年度	一六、九二〇、二一一円	六、〇二七、八三八円	七四七、九三二円	五、六二〇、六〇七円	四、五二三、八三四円	一〇〇
同 二年度	一六、三三〇、六二九	五、八八六、四〇〇	八〇八、九一二	四、九一六、二〇八	四、七一九、一〇九	九七
同 三年度	一六、一四一、八五八	五、六八三、八六四	八九六、四六九	五、〇一三、〇九二	四、五四九、四三三	九五
同 四年度	一六、二三三、五五七	五、八〇〇、七二四	八七三、九七八	四、八九〇、五八六	四、六六八、二六九	九六
同 五年度	一八、六四二、二〇八	六、五九〇、一五三	九五二、九三五	五、七八二、八七一	五、三一六、二四九	一一〇

同　六年度	二〇、三五八、五六三	六、九二四、三七七	一、一八〇、四六五	六、四四二、三七八	五、八一一、三四三	一三〇
同　七年度	二一、六四七、〇〇三	七、五五二、三四五	一、〇九三、二〇五	六、〇三五、六五五	六、九七五、八九八	一二八
同　八年度	二五、七六四、六五四	七、六一九、四一二	九七九、〇八五	七、四五六、六〇三	九、七〇九、五五四	一五三
同　九年度	三〇、四八四、三一七	七、七〇八、三三五	九九七、七七八	九、三五〇、七七三	一二、四二七、五三二	一八〇
同　十年度	二三、四〇九、〇八六	六、七七二、六一四	一、七五三、六七七	三、二二三、七九六	一一、六五八、九九九	一三八
同十一年度	二六、二一一、三五五	六、二八三、二七七	一、八一〇、三〇七	七、三七一、四八二	一〇、七四六、二八九	一五五

六百萬圓に激減せり。

[illegible]

四〇 [illegible]

[illegible]

四一 銀行

臺灣に於ける銀行は大正十一年十二月末現在行數八（内三十四銀行は支店）にして、其支店數四十三、資本金九千三百萬圓、準備金一千七百萬圓、純益金七百六十五萬圓、預金二億一千八百萬圓、貸出金六億三千八百萬圓なり。

	支店	公稱資本金	準備金	純益金	預金	貸出金
		千円	千円	千円	千円	千円
總數	四三	九三、五〇〇	一七、〇七六	七、六五三	二一七、七五六	六三八、三九六
臺灣銀行	一四	六〇、〇〇〇	三、一八〇	五、五四八	一七〇、二五三	五五二、六四五
華南銀行	—	一〇、〇〇〇	一五九	五八二	四、六六三	二八、六七八
新高銀行	一〇	八、〇〇〇	一、二八〇	四一七	六、〇四六	一二、四四七
彰化銀行	六	六、〇〇〇	一、八〇〇	三九二	七、九四五	一二、二三八
臺灣商工銀行	九	五、〇〇〇	一、一一三	四四九	一三、五一六	一五、八一八
嘉義銀行	二	三、〇〇〇	五四五	一〇三	四、四〇八	七、〇七六
臺灣貯蓄銀行	—	一、〇〇〇	—	四	一、一〇六	二三七
三十四銀行臺灣支店	二	五〇〇	—	一五九	九、八一九	九、二六七

四二　物價

臺灣の物價は世界大戰の影響を受くること比較的少かりしも、戰局の進展に伴ひ、大正七年頃より著しき昂騰を示し、大正九年にはその絶頂に達したりしが、翌大正十年以降は稍〻低落の趨勢に在り。即ち主要なる日常生活必需品の臺北市に於ける物價の最近十一箇年の指數はよくその趨勢を示せり。

	米	甘藷	麥麵	米麵	醬油	牛肉(黃牛)	豚肉	木炭	薪
大正元年	一〇〇	一〇〇	一〇〇	一〇〇	一〇〇	一〇〇	一〇〇	一〇〇	一〇〇
同二年	九三	九五	九八	九五	一二五	九二	一〇五	一〇三	一一七
同三年	七一	六〇	一〇四	九二	一五〇	一二四	九三	一〇二	一五三
同四年	七七	五四	一〇四	七九	一五〇	八九	七九	八八	九〇
同五年	六五	五六	一〇四	八三	一五〇	九一	八四	一一〇	一三五
同六年	九三	七二	一二七	九八	三五〇	一一三	九一	一二四	一四二
同七年	一二七	一四〇	一七二	一三〇	五〇〇	一三五	一五三	一六四	一七二
同八年	一八〇	一四一	二〇〇	一五九	五五〇	二四六	一八八	二七一	二八三

同九年	一五七	一四三	二二五	一八五	五八五	二六九	三二八	三三九	三三三
同十年	一二六	一二七	一七一	一三九	五七七	二三三	一六一	三一四	三一五
同十一年	一二四	一八一	一五〇	一三五	三〇七	二〇七	一五二	二七三	二八〇

四三 教育

臺灣の教育は、大正十一年二月發布の臺灣教育令に依り、從來の方針を一變し、初等教育を除くの外は、悉く內臺人共學の制を採るに至れり。而して初等教育機關たる小學校及公學校は七百二十五校、兒童二十二萬三千人、高等普通教育機關たる高等學校、中學校及高等女學校は十七校、生徒四千三百人、師範學校は二校、生徒千八百人、實業教育機關たる實業補習學校、農業學校、工業學校、商業學校は十三校、生徒千六百人、專門教育機關たる高等商業學校、醫學專門學校、高等農林學校、商業專門學校は四校、生徒八百人、私立各種學校十六校、生徒二千三百人、書房八十八、生徒三千七百人あり。

次に初等教育機關を內地其の他と比較するに人口千に對する小學校兒童數は內地府縣の百五十人最も多く、關東州の百十一人九分最も少く、我臺灣は百二十六人一分を以て僅かに樺太の上に位す。又臺灣の公學校、朝鮮の官公立普通學校、樺太の土人教育所及關東州の官立公學堂及公立普通學堂兒童の人口千に對する割合は樺太の百十四人最も多く、我臺灣は五十五人五分を以て之に亞き、朝鮮は僅

かに十三人八分を以て最下位に在り。

一　教育機關（大正十二年三月末日現在）

	學校數	教員數	生徒又は兒童數	教員一人に付生徒
高等商業學校	一	三四	一五八	四·六
醫學專門學校	一	五一	四〇三	七·九
高等農林學校	一	二七	一一六	四·三
商業專門學校	一	二〇	一四五	七·三
高等學校	一	一二	八一	六·八
師範學校	二	八三	一、七六三	二一·二
中學校	八	一一二	二、〇二〇	一八·〇
高等女學校	八	一二二	二、一八五	一七·九
農業學校	一	一二	一九八	一六·五
工業學校	二	四九	四四七	九·一
商業學校	二	三六	五七八	一六·一
小學校	一三三	七三四	二二、四四八	三〇·六
公學校	五九二	四、九五〇	二〇〇、四二一	四〇·五
實業補習學校	八	三〇	四一三	一三·八
私立各種學校	一六	一九〇	二、二八九	一二·〇
書房	八八	一一八	三、六六四	三一·一

小學校、公學校、實業補習學校、私立各種學校及書房の學校數、教員は大正十二年三月末日現在にして其の生徒數は同三月一日現在なり。

二　內地其の他との初等教育比較

	校數	教員數	兒童數	一校平均兒童	教員一人に付兒童	人口千に付兒童
小學校						
臺灣	一三三	七三四	二二、四四八	一六八·八	三〇·六	一二六·一
朝鮮	四三二	一、六〇九	五〇、三三三	一一六·五	三一·三	一三九·一
樺太	一四七	三九七	一六、一八九	一一〇·一	四〇·八	一三七·四
關東州	一六	二七六	九、二六〇	五七八·八	三三·六	一一一·九

北海道	一、五三八	七、五三六	三七五、六五五	二四四・二	四九・八	一四四・八
內地府縣	二四、一〇一	一七七、八一三	八、二五七、二一六	三四二・六	四六・四	一五〇・〇
公學校						
臺灣	五九二	四、九五〇	二〇〇、四三一	三三八・五	四〇・五	五五・五
朝鮮	九四七	四、六五二	二三八、〇五八	二五一・四	五〇・九	一三・八
樺太	六	一一	一七四	二九・〇	一五・八	一一四・〇
關東州	一三七	五七二	二二、三六二	一七六・一	三九・一	三七・〇

公學校の朝鮮は官公立普通學校、樺太は土人教育所、關東州は官立公學堂及公立普通學堂の事實なり。

人口千に付兒童算出の基數は、小學校に在りては內地人のみを、公學校に在りては各其の本土人のみを以て算出す。

臺灣の兒童は大正十二年三月一日現在なり。

朝鮮は大正十一年度末(兒童は三月一日)現在にして大正十一年朝鮮總督府統計年報に依る。

樺太は大正十一年度末現在にして第十五回樺太廳治一班に依る。

關東州は州內のみの事實を揭け大正十一年末現在にして、關東州第十七統計書に依る。

北海道及內地府縣は大正十年三月末(兒童は三月一日)現在にして第四十二回日本帝國統計年鑑に依る。

四四　衞生機關

臺灣には大正十一年末現在、官立十二、公立十八、私立八十八、計百十八の醫院と、八百二十一名の醫師と、六百三十二名の醫生と、四百二十一名の産婆及助産婦を有す。醫師醫生一人に對する人口は全島平均二千六百三十人にして、その割合の最も少きは新竹州の二千七十七人、最も多きは臺東廳の三千五百八十六人なり。

	醫院 官立	醫院 公立	醫院 私立	醫師及醫生 總數	醫師及醫生 醫師	醫師及醫生 醫生	産婆及助産婦	醫師醫生一人に付人口
總數	一二	一八	八八	一、四五三	八二一	六三二	四二一	二、六三〇
臺北州	三	六	三八	三五〇	二二八	一二二	一一三	二、二二六
新竹州	一	—	七	二八〇	八一	一九九	三七	二、〇七七
臺中州	二	二	一〇	三〇四	一七三	一三一	八二	二、六九三
臺南州	二	六	一七	三一九	一九七	一二二	一〇七	三、一一二
高雄州	三	三	一五	一六八	一一〇	五八	六〇	三、四三二
臺東廳	一	一	一	二	二	—	一二	三、五八六

花蓮港廳	一	一	二	三	三	一	一〇	二四五六

醫生とは明治三十四年府令第四十七號臺灣醫生免許規則に依り免許を得て其の管轄内に於て醫師を業と爲す者とす。

本表の外藥劑師六十六人齒科醫師八十六名を有す。

四五 水道

臺灣に於ける既設水道の總數は二十三箇所にして、其の所管は臺灣總督府所管一（恒春種畜支所）、陸軍省所管三（臺東、玉里、バロン）、州所管三「臺南（新化を含む）高雄、屏東」にして其の他は總て所在市街庄の經營に係る。
大正十一年度末現在給水戸數は計量器の設備なき分七箇所を除き約三萬一千戸にして同年度中の消費水量は同しく千九百七十四萬立方米なり。

名稱	給水開始年月	年度末現在 専用栓戸數	年度末現在 共用栓戸數	年度中消費水量（立方米） 總數	年度中消費水量（立方米） 計量供給	年度中消費水量（立方米） 放任供給
淡水	明治三二年三月	一、三八七	一一〇	三六七、七九〇	三八、〇〇六	三二九、七八四
基隆	同 三五年三月	二、九六二	二、三八四	三、一一六、八八〇	四三二、九四八	二、六八三、九三二
彰化	同 四一年三月	四八四	一、三一一	一、三〇〇、八一〇	一〇七、三五四	一、一九三、四五六
臺北	同 四二年四月	一八、六八二	一三、五一七	一〇、五三三、七六七	一、八四二、三三九	八、六九一、四二八
北投	同 四四年六月	一七六	六	一、〇二八、八九〇	一八〇、八九〇	八四八、〇〇〇
士林	同 四四年九月	一八八	一二五	七九二、〇〇〇	四五七	七九一、五四三

大甲	同	四五年六月	一六七	一五一	三二、〇〇〇	四四、五三〇	二六七、四八〇
斗六	同	四五年六月	一三三	八三	一三三、七一三	四九、九六三	八三、七五〇
高雄	大正	二年四月	一、八五〇	八六一	二、五〇五、一一三	五九三、五〇七	一、九一一、六〇五
嘉義	同	三年二月	八八八	一、八四四	一、八四六、六八六	四八五、三七一	一、三六一、三一五
三叉	同	三年三月	二六	二五五	六七、五六二	—	六七、五六二
臺中	同	五年五月	一、七六六	三三八	二、九八五、〇三四	二三〇、七七九	二、七五四、二五五
屏東	同	五年一一月	三五一	四六一	七七二、一六九	一〇五、三〇三	六六六、八六六
花蓮港	同	一一年一月	三二四	三五七	四二八、八四六	六七、六四七	三六一、一九九
臺南	同	一一年四月	八四八	三三八	一、七七九、六二三	二六二、七七九	一、五一六、八四四
新化	同	一一年四月	二四	五一	八五、七七五	八、四三三	七七、三五三

本表の外金山、坪林、豊原、臺東、バロン、恒春（種畜支所）、玉里の七水道あるも、計量器の設備なく爲に消費水量不明に付之を除く。

四六　ペストとマラリア

臺灣は一般に不健康地の如く解せらるゝも、衛生設備の完成と共に、近年其の面目を一新し、ペストの如き大正七年以來全く之れか發生を見ず。又マラリアの如きも其の死亡數は年に依りて增減ありと雖も一般に減退の傾向を示し、明治三十九年に於て人口千に付死亡數三人二分一厘なりしものか、大正十年には一人八分八厘に減退し、其の實數に於ても同年間に三割三分を減したりしか、大正十一年には復た增加し人口千人に付死亡二人三分三厘を示せり。

	死亡實數		指數		人口千に付死亡	
	ペスト	マラリア	ペスト	マラリア	ペスト	マラリア
明治三十九年	二、五三四	一〇、五六二	一〇〇	一〇〇	〇・七七	三・二一
同　四十年	二、四四八	一一、七二五	九七	一一一	〇・七九	三・七八
同　四十一年	一、〇六四	一一、七四〇	四二	一一一	〇・三四	三・七五
同　四十二年	八五四	一〇、三三五	三四	九八	〇・二七	三・二六
同　四十三年	二五	九、一〇四	一	八六	〇・〇一	二・九三

四七　阿片吸食特許者

臺灣總督府は阿片問題に就ては嚴禁主義を避けて漸禁の方針を執り、阿片癮者と認むる者に限り之か吸食を許可し、漸次之か絶滅を期し、逐年豫期の目的の到達に近つきつゝあり。即ち之を最近十一年間に就て觀るも、阿片吸食特許者（本島人）の數は八萬七千三百七十一人より四萬二千百八人に半減したり。

	總數	男	女	指數	特許年齡以上の本島人百に付 總數	男	女
大正元年	八七、三七一	七五、九九九	一一、三七二	一〇〇	五・二	八・八	一・四
同　二年	八二、一二八	七一、三八一	一〇、七四七	九四	四・九	八・三	一・三
同　三年	七六、九九五	六六、八四〇	一〇、一五五	八八	四・六	七・七	一・三
同　四年	七一、七一五	六二、一五六	九、五五九	八二	四・五	七・六	一・三
同　五年	六六、八四七	五七、八二九	九、〇一八	七七	四・二	七・〇	一・三
同　六年	六二、三一七	五三、八三八	八、四七九	七一	三・九	六・五	一・二
同　七年	五五、七七二	四八、一五八	七、六一四	六四	三・五	五・九	一・〇

同 四十四年	三六一	七、九四九	一四	七五	0·一一	二·四三
大正元年	一八七	一六、九〇九	七	六五	0·0六	二·0六
同 二年	一二三	六、五七二	五	一六二	0·0四	一·九二
同 三年	四九四	一八、八八五	一九	一八四	0·一四	二·五六
同 四年	六四	一三、三五〇	一〇三	一三六	0·0三	三·八三
同 五年	二	一一、三四六	〇	一〇七	〇	三·三三
同 六年	三	九、七二九	〇	九二	〇	二·七三
同 七年	—	八、二九二	—	七九	—	二·三一
同 八年	—	八、一〇六	—	七七	—	二·三三
同 九年	—	七、七六〇	—	七三	—	二·二一
同 十年	—	七、〇七〇	—	六七	—	一·八八
同 十一年	—	八、九一六	—	八四	—	二·三三

四七　阿片吸食特許者

臺灣總督府は阿片問題に就ては嚴禁主義を避けて漸禁の方針を執り、阿片癮者と認むる者に限り之が吸食を許可し、漸次之が絶滅を期し、逐年豫期の目的の到達に近つきつゝあり。即ち之を最近十一年間に就て觀るも、阿片吸食特許者（本島人）の數は八萬七千三百七十一人より四萬二千百八人に半減したり。

	總數	男	女	指數	特許年齢以上の本島人百に付 總數	男	女
大正元年	八七、三七一	七五、九九九	一一、三七二	一〇〇	五・二	八・八	一・四
同　二年	八二、一二八	七一、三八一	一〇、七四七	九四	四・九	八・三	一・三
同　三年	七六、九五五	六六、八四〇	一〇、一一五	八八	四・六	七・七	一・三
同　四年	七一、七一五	六二、一五六	九、五五九	八二	四・五	七・六	一・三
同　五年	六六、八四七	五七、八二九	九、〇一八	七七	四・二	七・〇	一・三
同　六年	六二、三一七	五三、八三八	八、四七九	七一	三・九	六・五	一・二
同　七年	五五、七七二	四八、一五八	七、六一四	六四	三・五	五・九	一・〇

	總數	男	女	指數			
大正元年	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]
同二年	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]
[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]
同八年	五二、〇六三	四四、八九〇	七、一七三	六〇	三・三	五・五	〇・九
同九年	四八、〇一二	四一、三七五	六、六三七	五五	二・八	四・七	〇・八
同十年	四四、九二三	三八、六八〇	六、二四三	五一	二・六	四・四	〇・七
同十一年	四二、一〇八	三六、二五七	五、八五一	四八	二・四	四・一	〇・七

本表は各年十二月末日現在とす。

[illegible]

四七 阿片吸食特許者

[illegible]

四八 鐵道

[illegible]

四八　鐵　道

臺灣の鐵道は、大正十一年度末には官設鐵道（阿里山鐵道を含む）の營業哩數五百十三哩に達し、外に私設鐵道千二百四十哩を有す。私設鐵道は主として製糖會社の經營する所にして、內營業線は二百九十八哩なり。

今之を內地其の他と比較するに百方里に付鐵道營業線の哩數は關東州の二百九十一哩九分最も多く、我臺灣の六十九哩九分之に亞き、樺太の四哩一分最も少く、更に人口萬に付哩數は樺太の十哩四分二厘最も多く、朝鮮は一哩未滿にして最も少く、臺灣は二哩を以て內地と伯仲の間に在り。

	營業線路延長（哩）總數	營業線路延長（哩）官設	營業線路延長（哩）私設	百方里に付哩	人口萬に付哩
臺灣	八一〇	五一三	二九八	六五・一	二・一
朝鮮	一、四八六	一、一七六	三一〇	一〇・四	〇・八
樺太	一三九	一三九	一	五・九	一・六
關東州	六八六	一	六八六	二九一・九	七・三

北海道	一、七五五	一、六八四	七一	一九・六	七・六
內地府縣	一一、三三二	八、八五六	二、四六六	五九・六	二・〇

朝鮮、樺太、關東州は大正十一年度末、北海道、內地府縣は大正九年度末の事實なり。

四九　郵便、電信、電話

臺灣に於ける郵便、電信、電話の現況を觀るに、大正十一年度に於て通常郵便は引受五千九百萬、配達六千六百萬、電信は發信百二十三萬、著信百二十七萬、爲替は振出二千四百四十萬圓、拂渡千五百九十萬圓、貯金は預入一千萬圓、拂戻九百六十萬圓なり。又同年度末現在電話加入者數は一萬三百二十、年度中加入者發信通話度數は四千二百五十萬、公設電話發信通話數二十一萬あり。

今之を內地其の他と比較するに、人口十に對する割合は通常郵便引受數、電報發信、爲替振出及貯金預入を通して最多數を示すは樺太にして、其の最小數は通常郵便引受、電報發信及爲替振出の三は朝鮮、貯金預入は臺灣なり。又人口千に付電話加入者數の最も多きは樺太、最も少きは朝鮮にして、同加入者一に付通話度數の最も多きは北海道、最も少きは朝鮮なり。

一　郵便、電信、爲替、貯金及電話

通常郵便	引受	五九、一七九、八三〇
	配達	六五、六六四、八四四
	人口十に對する引受	一五四・九

電信	發信	一、三三三、三六〇
	著信	一、二七三、一八二
	人口十に對する發信	三・二
爲替	振出	二四、四〇五、四六四円
	拂渡	一五、九三五、五三七
	人口十に對する振出	六三・九
貯金	預入	一〇、三五二、一八二円
	拂戻	九、六一四、八三二
	人口十に對する預入	二六・八
電話	年度末現在加入者數	一〇、三三〇
	年度中加入者發信通話度數	四三、五一四、五九九
	人口千に付加入者數	二・七
	加入者一に付通話度數	四、一三〇
	公設電話發信通話時數	二二三、七三〇
	人口千に付公設電話發信通話時數	五五・七

二 内地其の他との比較 （大正十一年度）

	人口十に對する 通常郵便引受	人口十に對する 電報發信	人口十に對する 爲替振出	人口十に對する 貯金預入	電話 人口千に付加入者數	電話 加入者一に付通話度數
臺灣	一五四・九	三・二	六三・九円	二六・八円	二・七	四、一三〇
朝鮮	九六・四	二・八	五八・五	三二・一	一・〇	四、〇九三
樺太	一、一三五・九	六五・七	一、〇二三・二	二九六・七	一七・九	四、三九三
關東州	四七七・〇	二四・五	一九八・二	九七・〇	一三・三	五、一三五
北海道	六四九・三	二二・五	二六〇・八	一四三・二	六・三	六、一〇〇
内地府縣	七一四・五	二一・六	一五九・一	一四六・二	六・四	四、四〇五

朝鮮、樺太、關東州は各廳統計書に依る。
内地府縣及北海道は第四十二回帝國統計年鑑に依る。
電話に就ては内地府縣及北海道は大正十年度の事實にして、遞信省通信統計要覽に依る。

五〇 警察官署及職員

臺灣の地方警察機關數は大正十一年末現在に依れば州警務部五、廳警務課二、警察署四、警察分署二、郡警察課四十七、支廳六、派出所及駐在所千三百九十にして、同職員の數は警視二十一人、警部及警部補五百五十八人、巡査七千百三十三人なり。

今之を內地其の他と比較するに、一方里に對する巡査の數は、關東州の三人九分最も多く、臺灣は三人一分を以て之に亞き、巡査一人に付人口は北海道の千七百四十三人第一位を占め、內地府縣の千二百二十八人之に亞き、我臺灣は五百四十七人を以て僅かに樺太の上に在り。

	警察署	警察分署	派出所及駐在所	職員 警視	職員 警部及警部補	職員 巡査	一方里に付巡査	巡査一人に付人口
臺灣	五七	二	一、三九〇	二一	五五八	七、一三三	三・一	五四七
朝鮮	二五一	—	二、五三三	五五	一、五一五	一九、一八八	一・三	九一九
樺太	六	四	六八	—	一九	二一〇	〇・一	五七二